

同志社大学 文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】
大学教育推進プログラム

プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育
～課題探求能力を育成するPBL教育の方法論的整備～

未来を切り拓く PBL

「教育」の壁を越えて



シンポジウム・レポート

The report of the symposium

2010.2.20(土)

未来を切り拓くPBL - 「教育」の壁を越えて-

2010年2月20日(土)13:30～17:45 同志社大学 今出川キャンパス【明德館21番教室】

次 第

13:30

■あいさつ

田端 信廣 同志社大学 副学長 文学部 教授

13:40

■報告

「PBL推進支援センター設置報告とシンポジウム開催の趣旨」

山田 和人 同志社大学 PBL推進支援センター長 文学部 教授

14:00

■第1部

基調講演 『京都市から見た地域連携教育の可能性』

門川 大作 京都市長

■第2部

14:30

事例報告1 小学校における試み～小大の取組みとして

京都市立朱雀第二小学校・同志社大学

◆2009年度プロジェクト科目「演劇で子ども達と学ぶ 企画実践プロジェクト」

【プロジェクト概要】「演劇を教育現場に取り入れる」をテーマに、小学校で演劇ワークショップを重ねるなかで、小学生とともに創る演劇ワークショップの新しいかたちを実践した。

吉田 綾美 京都市立朱雀第二小学校 教諭

小学校五年生の担任

谷井 佳輔 同志社大学商学部3年次生

企画から渉外活動、発表まで携わることの魅力を感じました。
多くの経験、感動をし、最高のプロジェクトとなりました。

後藤 いずみ 同志社大学社会学部2年次生

15:00

事例報告2 生徒・教諭による報告 ～中高の取組みとして

大阪桐蔭中学校高等学校

◆中学校国語科 国語科から「プロジェクトワーク」へ

【プロジェクト概要】国語科から発信された「生きる力」を育てる試みが、学年クラスの枠を取り払い、テーマを選んで体験型の学習をする「プロジェクトワーク」に成長していった経緯を報告します。

田村 かすみ 大阪桐蔭中学校高等学校 国語科客員講師

神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程在学中

西原 輝将 大阪桐蔭高等学校3年生

ディベートクラブ所属

中村 朱里 大阪桐蔭中学校3年生

ディベートクラブ所属

15:30

事例報告3 大学生による報告 ～小大の取組みとして

同志社大学・同志社小学校

◆2009年度プロジェクト科目「わらべ歌あそびを通して子ども達に京のこころつなげるプロジェクト」

【プロジェクト概要】京都に残る多様な「わらべうた」の取材し、記録保存するとともに、次世代につなげる活動を小学生、地域の方たちと一緒にやった。

竹澤 啓二 同志社大学 文学部4年次生

自他共に認める「プロジェクト科目の申し子」です。

星野 康平 同志社大学 法学部4年次生

これを機会に、教育の在り方について視野を広げていきたい。

16:00

休憩(15分)

<展示発表>

同志社大学 2009年度 プロジェクト科目 学生による展示発表1

◆「花のキャンパスライフ」から情報発信に挑戦、新聞、ラジオ、ネットで

【プロジェクト概要】大学生活を複数メディアを通して発信。企画制作出演までを行う。ラジオ番組制作。

安藤 美穂 同志社大学 経済学部3年次生

同志社大学 2009 年度 プロジェクト科目 学生による展示発表2

◆京都の伝統織物の情報発信プロジェクト

【プロジェクト概要】カフェイベント・展示会・座談会を通して錦織の情報と魅力を発信。オリジナル文様制作。

堀内 ゆうき 同志社大学 文学部4年次生

同志社大学 2009 年度 プロジェクト科目 学生による展示発表3

◆私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう

【プロジェクト概要】「私たちと着物の架け橋になる」をテーマに着付教室、ファッションショーを企画実践。

池田 優祐 同志社大学 経済学部4年次生

■第3部

16:15

学生によるパネルディスカッション 『京都の文化を考える』

同志社大学 2009 年度プロジェクト科目受講生

◆わらべ歌遊びを通して子ども達に京のこころつなげるプロジェクト

竹澤 啓二 同志社大学文学部4年次生

星野 康平 同志社大学法学部4年次生

◆目指せ国民文化祭！誕生させよう京都学生文化コンシェルジュ！

渡名喜 美和 同志社大学政策学部4年次生

◆私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう

池田 優祐 同志社大学経済学部4年次生

◆「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト

奥野 世理奈 同志社大学文学部4年次生

16:55

シンポジウム 『「教育」の壁を越えて』

同志社大学 文学部 教授・PBL 推進支援センター センター長 山田 和人

プロフィール: 文学部国文学科教授。専門は日本近世文学。江戸時代前後の文学や芸能、国内外の人形芝居の調査・研究。日本近世文学会事務局代表、コンソーシアム京都高等教育研究センター高等教育実態研究プロジェクトリーダー、同志社大学プロジェクト科目検討部会長、2009 年より同志社大学 PBL 推進支援センター長。

東京電機大学 情報環境学部 教授 中村 尚五

プロフィール: 東京電機大学電子工学部ではデジタル信号処理関係を中心とした教育と研究に従事。平成 13 年より同大情報環境学部。学長補佐、情報環境学部学部長、同研究科委員長等を歴任。特に新設学部であった情報環境学部では教育改革に従事。印西市各種委員会の座長、千葉県内の研究会の会長等を務める。

大阪桐蔭中学校・高等学校 教育相談室長 堤 晶子

プロフィール: 教育相談室長、カリキュラムマネジメント並びに PBL 手法の研究開発を担当。PBL は中等教育においても知性・感性と行動力を備えた真のエリート育成に有効であることを実証している。

京都市立朱雀第二小学校 教諭 吉田 綾美

プロフィール: 三十年間、教諭として活躍になり、2009年度から朱雀第二小学校五年生の担任として教壇に立たれる。

同志社大学 商学部 3年次生 谷井 佳輔

プロフィール: 2009 年度プロジェクト科目「演劇で子ども達と学ぶ 企画実践プロジェクト」リーダー

17:40

■あいさつ 山田 和人 同志社大学 PBL推進支援センター長 文学部 教授

17:45

終了

18:00～

■レセプション

19:30

会場 : 同志社大学寒梅館1階 Hamac de Paradis ※事前申込

シンポジウム

未来を切り拓くPBL—「教育」の壁を越えて—

2010年2月20(土)13:30~17:45

同志社大学今出川キャンパス明德館 21 番教室

司会 ただいまより文部科学省大学教育学生支援推進事業「テーマA」大学教育推進プログラム「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育～課題探究能力を育成するPBL教育の方法論的整備～」の取組としてシンポジウム「未来を切り拓くPBL—「教育」の壁を越えて—」を開催いたします。開催に先立ちまして同志社大学副学長田端信廣文学部教授よりご挨拶がございます。

■あいさつ

同志社大学副学長 文学部教授 田端信廣

田端 シンポジウムの開会に先立ちまして一言ご挨拶を申し上げます。まず、本日のシンポジウムに、かくも多数の皆様にご参集を得ましたことに感謝し、心より御礼申し上げます。何よりも本日のシンポジウムには、ご公務ご多忙の中、貴重な時間を割いていただきまして、門川京都市長のご講演を賜ることができるということでございます。私から紹介を申し上げるまでもなく、門川市長は行政のトップであられると同時に、教育問題の専門家であられます。地域の教育向上に向けた、熱い思いがこめられたご講演が、本日のシンポジウムに花を添えていただけたことになったことを大変うれしく思い、壇上からではございますが、門川市長に厚く御礼申し上げます。



本日のシンポジウムは3部構成からなっております。第2部、第3部で、小学校、中学校、高校、大学の垣根を越えて、プロジェクト教育向上のためにさまざまなご提言をいただけることになっております登壇者の先生方にも厚く御礼申し上げます。

さてプロジェクト型教育であります。実は同志社大学はかなり早い時期からこの形の教育に大学を上げて取り組んでまいりました。たとえば、「プロジェクト・ベースで展開する参加型・実践型学習形態『PBL』の可能性」のパンフレットの裏面に2006~2010年度までのプロジェクト科目のテーマの一覧を掲載しています。実際は毎年約30科目近い科目が設定されていますが、その一部が抜粋されて載っております。これを見ると、同志社のプロジェクト型教育は2006年度から始まったように見えますが、正確には2002年度から開始されています。京田辺校地にありますローム記念館を拠点にして正課の授業科目ではなく、課外活動として多くのプロジェクトが生まれ、これを教員が指導することを行ってまいりました。これがスタートであります。その活動の積み重ねによって2004年度には文

部科学現代GPに採択されたプログラムがございます。これが「プロジェクト主義教育による人材育成～プロデュース・テクノロジーの創成」というプログラムでした。課外活動での蓄積を踏まえて2006年、プロジェクト教育を正課の科目に導入する。しかも全学共通教養教育に持ち込むということを試みたのが2006年度からのプロジェクト型の科目であります。幸いにして、このプログラムも2006年度の現代GPに採択されました。その時のタイトルは「公募性プロジェクト科目による地域活性化～往還型地域連携活動のモデルづくりを目指して」でした。公募性と申していますように、このプログラムの特色の一つはプロジェクト科目を指導する講師を広く学外から公募するという点にありました。個人であれ、企業であれ、NPOであれ、自治体であれ、学外の講師で学生たちを指導と思う方々に手を上げていただき、審査し、講師にするという方式をとりました。もう一つの特色は「地域往還型」という言葉に込められています。大学の地域連携といいますが、従来はもっぱら大学が持っている人的リソース、知識やノウハウを地域に持ち出して啓蒙的活動を行うということが主流というか、そういう趣があったのですが、実は地域には人間を育てる力が長い間に渡って蓄積されてきている。地域の持つ教育力を大学の教育に生かす、地域から大学の中に教育する力を持ち込む、そして与えられた力を、もう一度地域に返すという意味で往還型地域連携活動と呼んでいました。このモデルを2006年度からスタートしたプログラムでつくろうということでありました。

このプログラムが終了した後、2009年に本シンポジウムの母体になっております「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育～課題研究能力を育成するPBL教育の方法論的整備」というプログラムがスタートするという歴史的経緯をたどっているわけであります。この流れと蓄積の上に、PBL教育を同志社の教育のお家芸の一つにしたいと思っております。それはなによりも、こういうプログラムへの学生の参加意欲が高い、そしてさまざまな面で効果があると実感しているからであります。

実は、こういう3段階を経て同志社大学のプロジェクト型教育というものが発展してきていますが、それぞれの特徴はサブタイトルによく現れています。第三段階目の現在の試みは、サブタイトルにも表現されているように、もう一度PBL教育の方法論を整備しようじゃないか、という趣旨で始まっています。少し経験的、実感的に行われてきたプロジェクト型教育を、さまざまな角度から問い直して、方法を精緻化することが、第三段階目のプロジェクト科目に対する思いであります。プロジェクト型教育とは何か。これからのシンポジウムで語られると思いますので、ぜひ本日のシンポジウム、課題発表に期待をいたしまして、私のご挨拶に代えさせていただきたいと思っております。本日はありがとうございます。

司会　　続きまして同志社大学PBL推進支援センター長、山田和人文学部教授より「PBL推進センター設置報告とシンポジウム開催の趣旨」についてご報告させていただきます。

■報告「PBL 推進支援センター設置報告とシンポジウムの開催の趣旨」

同志社大学 PBL 推進支援センター長 文学部教授 山田和人

山田 PBL 推進支援センターを開設いたしました。今回、GP に採択されたことで、全学的な教育・研究組織として昨年 11 月 1 日に設置が決まりました。それから急ピッチで基盤整備を行い、現在、センターとして十分に機能を果たす段階までまいりました。PBL 推進支援センターを設置しました経緯についてお話を申し上げたいと思います。

PBL (Project-Based Learning) とは、プロジェクト活動をベースにした実践型・参加型の学びのスタイルを指しています。本学では、2006 年度以来全学共通教養教育科目として「プロジェクト科目」を設置し、PBL の推進に取り組んできました。テーマの公募制を採用し、地域社会や企業・団体・個人の「教育力」をダイレクトに大学の正課授業に導入することによって、現場で学び、本物にふれることを通して、自ら取り組むべき課題を発見し、その解決のため粘り強く考え抜く力をもった学生の育成に取り組んできました。

この段階では、地域連携型教育を目指していく中で、それを教養教育の一つとして PBL を推進していくことになりましたが、しかし教養教育の中に PBL を位置づけるということはどういうことなのか。PBL というのはいろんなかたちがありえるわけです。小学校、中学校、高等学校、大学、大学院、ひょっとしたら幼稚園に至るまで設置することができる、多様性と個性を持った教育手法です。一般的には医療系、看護系、情報系、工学系等の専門科目の中にこのプロジェクト学習を導入していくということが、より多く行われおります。それに対して教養教育の中に設置するとなると一体どうなるかということになるわけです。それがたとえば専門科目ですと、専門分野の中の到達目標があり、そこに向けてプロジェクト学習を採り入れてくこととなります。では、教養教育の場合は到達目標が何なのか。私たちが一つ考えてみるべきだろうと思いましたが、「プロジェクト・リテラシー」という考え方です。プロジェクトとは何か、プロジェクトはどのように動いているのか。その動きを実際に自分自身で経験し、体得していく、そうすればその中で培った課題探求力・課題発見力・企画立案力・自己表現力・自己管理能力・コミュニケーション力・マネジメント力・リーダーシップ・フォロワーシップ等のスキル、技術、技能は一般社会に出た時、その学生にとって有効に働くものになるのではないかと考えるに至りました。こうしたアクティブな教養としてメディア・リテラシー教育が必要だと考えました。しかも、ここで留意したいのは、こうしたリテラシーを運用していくものこそが良心であり、モラルだということです。実際、プロジェクトは人間同士のつながりを促し、他者との対話を通して、ひとつのチームを作り上げることで進められていきます。PBL は、まさに協動的にお互いが学び合う双方向的な学びの場でもあります。そうしたプロジェクトの教育力を活用して、まさに同志社大学の建学の精神である良心を手腕として生きる人材を育成



し、複雑化・高度化した現代社会のなかで失われつつあるモラルを身につけた人間形成を目指しているといえるでしょう。これらをトータルにとらえて、プロジェクト・リテラシーと命名することにしました。そこで、プロジェクト・リテラシーをいかなるかたちで育成できるかということが、今後の我々の3年間の試みとなってまいります。

そしてその手法を私たちは新しい教養教育を提案するかたちで行っていかうとしています。プロジェクト・リテラシーを育成していくための方法は何か。ここで一つ言えることは教科書やテキストを読んで、プロジェクト・リテラシーが身についたな、というふうには決してならないということです。自分たちがプロジェクトに取り組んでいく実践的な学習活動の中でしか身につくというふうには言えるでしょう。そこで全学共通教養教育科目として設置されたプロジェクト科目を、さらにバージョンアップしていく形で、学生の成長度、教育手法、評価の方法等について根本的に見直していきながら、さらにPBLの可能性と課題について考えていきたいと思えます。

PBL推進支援センターとしては、今すでに各大学でどんどん取り組まれてきているプロジェクト型教育のあり方をもう一度問い直し、PBLの質的向上を目指さなければならない段階を迎えているという現状認識を持っています。それはどうかたちで可能になってくるのか。そこでもう一つ皆さん方に「同志社発PBLの試み」という冊子を配布させていただきました。これをご覧いただきますと、同志社大学の中でPBL型の教育が15拠点で実施されていることがわかるかと思えます。これは我々が実際に学内でPBL、それに準ずると思われるところに訪問調査をして、その結果、PBLだなど考えられるものを、ここに挙げております。副学長からも話がありましたが、そういうかたちで展開されてきたPBLが、いつのまにか、学内の教育の中に根づいていっていることが、改めてわかってきたわけです。同志社大学がPBL推進支援センターを設置する背景には、学内において展開されている多様なPBLの実践があることも事実です。それと同時に我々は、そのPBLに意欲的に取り組み、実践しておられる諸大学、あるいは今回話題になります小学校、中学校、高等学校等、各教育機関の壁を取っ払って、PBLという教育手法でつながっていきたいと思っています。同じ土俵の上で、所属や年齢の異なったものが集まって、それぞれが自分たちに適した、自分たちらしいPBLを展開している姿を見せてもらいたいと思うようになりました。学内、学外を問わず、PBLの持っている教育の可能性を全国に呼びかけて、みなさまと一緒にその豊穡なる沃野を開拓していきたいと考えております。文字通り、教育・研究のためのネットワークを広げていきたいと思っています。

PBL推進支援センターは、大学の教育支援機構の中に位置づけられたセンターです。この組織の中で、各大学で行われているPBL、諸教育研究機関のPBLとの連携をとりながら、推進支援センターとしての役割を果たしていきます。教育効果の測定、自己点検評価、外部評価も仰ぎながら、それを前進させていきたいと考えております。また、この推進支援センターのもとにPBL推進協議会を立ち上げています。この前身は2006年度から取り組んできましたGPの中で組織されたPBL研究会です。関西、関東の大学で実践されているPBLの事例報告を通して交流と研究発表を行い、そして昨年度には各大学のPBLを実際に実践した学生たちに共同で成果報告会を開いたりという活動もやってまいりました。この研究会は、PBLを推進していくために、さらに活動範囲を広げて連携していく段階を迎えたという共通認識を持つに至りました。すでに1月9日にPBL推進協議会として第1回目を開催し、PBLと学びの空間について議論をいたしました。まさにPBL推進支援センターとPBL推進協議会が両輪になって、PBLの研究とPBLの普及・発展を目指していきたいと考えております。

実際にPBLを推進していこうと思いますと、PBLという教育手法が、実際に教室内、キャンパス内に止まっているものではなく、そこから飛び出して地域や社会とのつながり、連携の中で、学生たちが非常に大きな刺激を受けて、自ら問題を発見し、課題を探究していくことができる力を身につけさせてくれることを期待しているわけであります。そして、このPBLに関わる教職員が、そして協力者のみなさま、市民のみなさまのご協力を仰ぎ、それを力にしながら推進支援センターとしてPBLの普及・発展のために努めてまいりたいと考えております。

本日はその第1回目、『未来の切り拓くPBL—「教育」の壁を越えて—』というシンポジウムであります。先ほど申し上げたように本センターは、より多くの方々との連携を目指していくという位置づけでございますので、今回の門川市長の基調講演は「京都市から見た地域連携教育の可能性」という、まさに、これとぴったりのテーマでお話をいただくことができることになりました。大変ありがたく思っております。

第2部の事例報告1は、京都市立小学校で、学生が持ち込んだPBLが、どのように活かされるのか。学生を受け入れる公立小学校の立場から、いろいろ問題点なども出てくるのではないかと思います。事例報告2では、大阪桐蔭中学高等学校から中学、高校の生徒さんがプロジェクトワークというユニークな教育科目を履修されており、その事例報告を。そして事例報告3では同志社小学校と同志社大学の学生が連携して実施した小大連携の試みの一端をご紹介したいと思います。この事例報告をごらんいただきますと、皆さん方もお気づきかと思いますが、小、中、高、大の教育機関の壁を越えて一つのPBLの広がりをお私たちが目指したいという思いが、ここに込められていることにお気づきかと思えます。

第3部で学生パネルディスカッションを企画いたしました。このシンポジウムを企画している時に、熱心にプロジェクト科目に取り組んできたひとりの学生さんがわたくしの研究室をノックされまして「先生、実はプロジェクト科目で4、5科目、京都に関するものをやっているところがあります。せっかくですから何かどこかで話をする機会をつくってもらえませんか」といわれまして、一瞬ドキッとしたんですね。なぜドキッとしたか。「そういうことをやってくれたらいいな」といつも思っていたからです。そこでシンポジウムでパネルディスカッションを試みたらと声をかけてみたら、「じゃ、やります」と言ってくれたものですから、それ以降、口出しはできません。彼らにすべてを任せることにしました。ただ、内心ハラハラしております。なぜそれを任せたのか。PBLという教育手法の根底には、学生をどうとらえるかという教育の原点にかかわってくる問題があると思います。つまり、PBLにおいては、学生は育てられる存在ではないのだと思います。むしろ自ら育っていく主体として学生があるに違いないと思います。それがかりに失敗しようと成功しようと、自分たちが一から立ち上げて企画し、実行し、それに対してみなさまのご批判を乞うことができるならば、PBLによる学生の成長度をみなさまにおはかりすることができる絶好の機会になるのではないかと感じた次第であります。

そして最後にシンポジウムを企画いたしました。それが「教育の壁を越えて」ということですが、ここで大学と中高と小学校が、それぞれで取り組んできたなかで、PBLという教育手法は従来の教育のカリキュラムや教科の考え方とずいぶん違っていますから、おそらくそれを実行しようとする、さまざまな形で衝突があったり、ぶつかったり、先に進まなかったりする困難も伴ってくるでしょう。しかしながら、苦しい、しんどいと言っていたのでは一歩も前に進めません。そういう悩み、課題を私たちがお互いに共有していくことができるならば、その壁を乗り越えていくこともできるのではないかと。しかも、その壁は必ずしも外にあるだけ

ではない。壁は内側にもあるのではないか。これが教育だ、これが大学の教育だと、ひょっとしたら私たち自身が、教育に対するある種の一つの枠組みを設定してしまっている、無意識のうちに。外側の壁、内なる壁、その壁を見つめ、それを克服していきながら、そして私たち自身の未来を切り拓くPBLが、社会の未来を切り拓いていっていくPBLとして大きな広がりを持って推進されていくように、これからも尽力していくことができれば、それに優る幸せはございません。以上をもちましてPBL推進支援センターの設置経緯と趣旨、及び今回のシンポジウムの企画の狙いについてお話をさせていただきました。

■基調講演「京都市から見た地域連携教育の可能性」

京都市長 門川大作

司会 それでは第1部、基調講演「京都市から見た地域連携教育の可能性」、ご講演は京都市長、門川大作様です。

門川 皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました門川大作です。いま、田端副学長、山田センター長からPBLのお話を聞かせていただいて改めて感激いたしております。京都市が20年あまり前に大学政策への取組を開始し、平成6年に、現在の大学コンソーシアム京都の前身である「京都・大学センター」を立ち上げました。また、全国に先駆け、キャンパスプラザ京都という、画期的な施設を作りました。そこでは同志社大学の八田学長に理事長を務めていただき、50の大学等が参画し、約500科目の単位互換制度ができています。他都市でも、このような組織をつくるのが流行ってきていますが、京都ほどのことはできない。すばらしい京都の特質ではないかと思っています。同志社大学で学ぶのもすばらしい、京都大学で、立命館大学、ノートルダム女子大学等で学ぶのもすばらしい。しかし京都の大学で学べば、あの科目はあの大学で学ぼう。あの教科はあそこの先生から学ぼう。京都で学ぶ。もちろん主として同志社で学びながら、あっちの大学で、あそこの教会で、あそこのお寺で学ぶ、こういうことが大いにできる。京都まるごと大学ではないか。京都のすばらしい歴史と伝統と文化、産業、都市の営み、すべてが学びの場ではないか。こういう取り組みをしていただけるのではないか。それは同時に京都のまちの活性化に大いにつながるといことを改めて感じています。



私も30数年教育委員会で仕事をしてまいりまして、市長になって2年ですが、この間一貫して、地域と連携した活動に取り組んでまいりました。また、今回のPBLの取組は、大学コンソーシアム京都の理念を大きく発展させていただいた。素晴らしいことです。それを同志社のお家芸としてやっていただけることを、ほんとにうれしく思っております。本日は「京都市から見た地域連携教育の可能性」と題して、レジメを用意しておりますので、御参照ください。今、思っていること、私がしてきたことなどを中心に、お話したいと思っています。

市長に就任してこの2月25日で2年であります。教育長を退職しまして市長選までたった2カ月、厳しい選挙でした。今、思い出しますとすごく勘違いしたのですが、「京都のまちをこのようにしたい！」と、マニフェストさえきっちり作り、それに共感してもらえば選挙は勝てると思っておりました(笑)。同志社大学の学生さんも含めて、教育長時代からの知人も多く、学生さん達が、家に来てくれたりして、私の大学政策を聞いて、「門川さん、自分でマニフェストつくってはるんですか?」「あたりまえやないか」「そういう人も、いはるんですね」(笑)と、見るに見かねて手伝ってくれた感もします。1カ月かかってマニフェストをつくりました。しかし、選挙戦が始まったらマニフェストは一切配れない。動画のホームページ作りも手伝ってもらったのですが、それも閉じなければならぬ。選挙というものは、規制が多く、難しいですね。しかしマニフェストをきっちりつくっておいて良かったです。

その時に面白かったです。「マニフェストは、私が4年間ですること」と言う「門川さん、それ

はおかしいのと違いますか？ 私は市長候補になる人と会うたから私の意見は反映できる。しかし4年という、大学生が入学してから卒業する期間ですよ。後からきた学生はどうなるんですか？」。こういう提案ですね。私は、この意見を踏まえて、manifestoの最後に「進化するmanifesto」という主旨を書きました。4年間、約束したことだけやるのが私の責務ではない。激動の時代、進化していく。目標や手法は明確にして、その時々々に市民の皆さんの声をお聴きし、最適なものを市民の皆様とともに選んでいこう。それは決してmanifestoを守れなかったということではなく、その時、その時の最適なものを選んでいく。これも学生さんの一言からでした。そんなことで学生さんに、いろんなご縁をいただいています。

私は、政策の「融合」と「共汗」といつもいっています。今、行政はどこが悪いのか、それは、縦割りです。二重行政、三重行政であります。もう一つは行政主導であります。お金がある時に行政が主導して行った事業は破綻しました。大阪のWTCのことを例に出すまでもなく、一杯あります。それを打破しなければならない。そこで私は政策の融合、徹底して融合して。同時に共汗。共に汗をかく。行動することです。教育界でよく「共通理解」という言葉を使います。「皆で共通理解が大事や」といいます。確かにほんまに大事です。しかし、大抵、誰でも共通理解はしているんです。総論賛成ですね。環境問題、教育問題でも。共通理解はしているけど「共通実践」ができていないのです。動かない。頭でわかっているけど、行動に結びつかない。シンポジウムで議論していると、空論になって意見が対立する。しかし目標を決めて皆で地域に出て、子どもの前で、学生さんと一緒に行動した時、一緒に汗かいた時に、共感して、共汗の輪が広がる。達成感ができる。次に課題も見つかってくる。こういうことで、地域に根ざした政策の「融合」、そして「共汗」といっています。

まちづくりは人づくりから。厳しい社会経済状況であります。しかしピンチはチャンスであります。京都のまちがそれを証明できます。京都のまちは、1200年を超える歴史の中で常にピンチをチャンスにしてきました。たとえば、明治維新で、京都は都の地位を失いました。約140年前、まちなか、洛中は6、7割、焼けていました。10年、20年たてば、キツネやタヌキの住処になると。こんなことをいわれるほど、大変な状況でした。その時に京都の先人たちは皆で、学校をつくらしたんです。文部省が明治4年にできます。しかし、京都は明治2年に地域制の学校をつくったのです。「竈金の精神」です。竈のある家はみんなでお金を出そうということで、竈の数ごとにお金を出し合い、市民みんなで運営したのです。竈が5、6個あるところは5口、6口、竈が一つのところは1口出す。そして、みんなで学校を建てて運営しました。文部省が小学校をつくる方針を出したのが明治5年ですが、日本で最初の地域制の学校が64校が、明治2年にできたのです。

そして京都に同志社大学ができて、立命館や京都大学等ができた。大学ができて京都は教育のメッカになっていく。こういうことで140年たっても町に活力がある。私は、ピンチはチャンス、今こそ人づくりを大事にしていきたいと考えています。

今、100年にいっぺんの金融経済危機といっていますね。100年前の危機は、は1929年、ウォール街から発しました。日本でも昭和4、5年、昭和恐慌、昭和5年は、鞍馬の火祭りが中止になるほどでありました。その時に京都の先人は何をしたか。京都市に観光課をつくったのです。そんな不況のど真ん中で観光課をつくり、そして北山、東山、鴨川周辺を初めて「風致地区」に指定した。また、京都駅に大きな観光案内所をつくったのです。つまり、今に続く京都の観光行政のスタートは100年に一度の経済危機の時なんです。景観行政のスタートも、土台づくりも100年にいっぺんの危機の時。暖衣飽食していた時代は、たいしたことはしていない。そうした京都のDNAを受け継いでいる私たちは、今、危機の時こそ、しんどい時

にこそ、未来は切り開けると確信しています。そうってお互い自らを奮い立たせながら、皆さん、就職戦線も厳しかったら、厳しい時こそ、すばらしい出会いがある。共々に頑張りたいなと思います。

さて僭越ですが、大学も含めて今の教育の何が課題か、何が問題かということ述べたい。一つは、学校、大学の学びと社会生活・日常生活、地域生活とが乖離している。もう一つは学校、大学での学びと、社会に卒業してからの学びや生活が乖離している。学校で学んだことが、生きて働く力となっていない。この二つの乖離であります。いろんな要因があると思います。初等中等教育の例ですが、戦前の国家神道が間違っていたとの反省の中から学校教育の中に宗教的なことがほとんど持ち込まれなくなった。宗教と学校教育は隔離された。また、戦後の日本は、イデオロギー対立が厳しかった。特に、教育界では、文部省対日教組と言われていた。したがって、政治的なものが学校教育の中に持ち込まれたら大変だと、そこも隔離した。また、商売に学校教育の場を使われたらかなわん、大変だということで、大学でも少し前までは、産学連携というと、産業界、独占資本に奉仕するのか、と批判していた大学関係者もおられました。経済活動や政治活動と教育とを切り離し、教育の場は、社会から隔離され、子どもたちを育てる。こんな状況でした。その結果、何が起こったか。大学の経済学部を卒業しているのにサラ金地獄に遭う。民主主義が大事、選挙が大事だということを子どもの時から学校でしっかり学んできたのに社会に出てから選挙に行かない。政治への関心は、世界中で日本が一番落ちているのではないのでしょうか。宗教的な情操が育ってなくて、オカルトにはまってしまうような状況もあります。何をしたらいいのか。大学生も子どもたちも含めて社会全体の中で学ぶ。大人の生き方の中から学ぶ。大人も子どもの手本になる生き方をすることが大事なのではないのでしょうか。大学と社会、小中学校との間も含めて、できるだけ、社会との壁を低くすることが大事ではないのでしょうか。同時に、卒業後に、「伸びる力」をつけることが大切です。同志社大学に入るために勉強するんじゃない。同志社大学に行ってから学ぶ、卒業してから社会で役に立つために学んだという、後伸びするための力をつけていく。そのためにも開かれた学校、大学、徹底して開かれた取り組みが必要だということを改めて感じます。

京都全体を学びの場に、大人はみな先生に。市民ぐるみの取組が広がっています。教育長時代に、ある先生方からこんなことを聞きました。百人一首を子どもに最も効率的に身につくように覚えさせる方法は何でしょう。テストをする。カルタ大会をやって景品を渡す。楽しく学ぶ、これも効果があるでしょう。しかし、一番効果があったのは低学年の子どもに教えることだったのです。高校生が中学生に、中学生が小学生に教えさせることにより、その時に教えた方の子どもがしっかりと身についたのです。人間は人のお役に立つ、人に喜んでもらえる時に最もモチベーションが高まって、最も身につくということその先生はおっしゃったのです。なるほどな、そういうものだと思いますね。そのような意味でも、このPBLは、学生さんが様々な企業に、地域に入っていて、そこで地域の人々から説明を聞くことは、地域の人々のモチベーションが上がると同時に、学生さんにとってもいい。学生さんが、研究成果を地域で話すことにより、学生さんの最高の学びにもなる。そこに、大学の専門的な研究が深まり、また、発信されることが、最高の成果となる。

「学識」「見識」「胆識」という言葉があります。「学識」。これは分かりますね。知識を中心にしたものでしょう。「見識」。あの人は見識がある。道徳、倫理観、幅広い教養。しかし、学識と見識は大事ですが、それだけではだめなのです。いま、今の社会では、リーダーが求められています。厳しい社会経済状況であります。国際化が進展しています。どんどん世界に打っ

てでる必要がある、今、最も大事なものは「胆識」です。胆の力。胆力という言葉があります。どんな困難にもめげず、相手を説得し、相手の魂を揺さぶり、行動へと導く。そして突破力、実践力のある人間です。私も長い間、教員採用試験も京都市の職員採用にも関わっています。ペーパー試験だけでは、あてになりません。教員採用試験でも公務員採用試験でもペーパー試験対策の予備校が一杯ありますから、訓練したらペーパー試験の成績は確実に上がります。そんなことだけでは意味がないのです。採用する側にも見抜く力があるのです。胆識が必要なのです。胆識を育てる、そのためには、何が必要か。端的に言って、人間と人間の関係やと思います。私の、好きな言葉は、「人間浴」です。欲望の欲ではありません。浴びると書きます。人は自然との関係でしか生きられません。自然との関係、森林浴、日光浴ともいわれる。同時に人間は、人間と人間との関係の中で、学び、育ち、気づき、時には傷つき、そして成長していく。それは大いに学内でやっていただいてもよい。すばらしい先生方と学生との関係もそうです。同時に社会に出て、社会のさまざまな人と学ぶ、感じる。その力を浴びる。それが自分の財産になるのではないか。その時に、本当にじゃんじゃん失敗していただく。日本の教育は、あえていうなら失敗を許さない教育ではないでしょうか。しかし人間は失敗から学ぶ。「傷ついた」分だけ「気づく」のです。大いに傷つく、失敗していただいたらありがたいなと感じています。激動する社会に出て、活躍される時に、若い時の失敗経験「傷ついて」「気づいた」経験は大きい。

そういう取り組みを目指していただいているのが、PBLのコンセプトの一つだと思っています。京都にはすばらしい都市特性があります。自然、芸術、宗教、環境、観光、ものづくり、そして、物語づくり。これら京都の都市特性、これを全部つないでいただいているのは大学であります。言い換えれば、学生さん、大学の先生です。これをいかに融合していただくか。京都の強み、同時にこれは日本の強みであります。これを今、日本の社会が、経済が、危機的な時に、融合していく、そして、大学の専門的な力を導入していただく、こういうことを、このPBLのプロジェクトでできたらありがたいです。

京都は、ものづくりの都市といわれています。京都は伝統産業から先端産業まで、ものづくりの都市です。しかし、こんな話があります。ものづくりと言えば、ドイツもすごい。歴史的には、かつて中国、そしていま発展途上国がどんどんものづくりに力を入れています。しかし、京都はものづくりと、千年前に源氏物語が書かれた、「物語づくり」の都市なんです。何よりもそれが、融合している都市です。例えば、一週間前に山口安次郎さんという方が105歳で亡くなりました。この人は西陣織で能装束を織り続け、国際的な活躍もされています。山口さんは、「西陣織は能装束をつくり続けてきたから世界最高の織物なんだ。」とおっしゃいます。「すばらしい世界遺産である芸術である能は、面と能装束と曲目がきっちり一致した時に人に感動を与えるのです。そのための能装束を、一生懸命つくり続けるからすばらしい西陣織が続いていくんだ」と。ものづくりと物語づくりが融合しているのです。お茶もお花も精神文化であり、ある意味では物語ですね。精神文化と物質文化、ものづくりが融合している。それが京都のまちなのです。茶道があるから千家十職がある。

また、宗教都市という要素が京都の最大の都市特性ではないでしょうか。同志社大学もそうです。京都は仏教都市といわれますが、仏教だけではないのです。教育長時代に驚いたことがあります。私立幼稚園が京都市内に100園ありますが、そのうちの仏教系が40数園、キリスト教系が20数園、神社等の幼稚園もあります。同志社が明治維新の後、京都にできたように、あらゆる精神文化の拠点都市京都に、あらゆる宗派の拠点ができて大学もできた。それらが、寛容の精神で見事に融合してきたまちであらうかと思っています。その融合の力を、連

携で発揮したい。

連携が重要です。それぞれの持つ強みを生かして連携していくことが求められますが、そのひとつがこのPBLのプロジェクトだと思います。連携する場合に私自身が肝に命じていることですが、情報、課題意識、危機感を共有し、それらを元に行動を高めていきます。さらに評価も共有することが必要であり、この度、私は、同志社大学PBL推進支援センターの外部評価委員にさせていただきました。

京都市の教育委員会では、学校評価を大事にしています。小中高校全校で学校評価をして公開しています。京都市はいち早く子どもの授業の評価を行い、保護者、地域の方々による学校評価も導入しました。その時に「自らが自らを振り返り、同時に相手を評価する」振り返りを大切にしました。例えば、子どもに、「あなたは予習していますか。先生や友だちの話聞いていますか」と聞くと同時に、「先生の授業はわかっていますか。先生は、質問に答えていただいていますか」と評価します。私も、同志社大学PBL推進支援センターの外部評価委員に就任し、同志社大学の取組を評価すると同時に、京都市政がそれに応えることをしているかどうかを、私自身の行動がどうなっているかを振り返らなければいけないと考えています。評価とは、相手をまな板の上に乗せて、ここがいい、そこが悪いという評価をすると思っ

ている方も多し。それだけでは、よくなりません。お互いが自らを振り返り、互いに評価し、評価される。また、足りないところを批判しあう関係から、足りないところを足しあい、高めあう関係になっていく必要がある。そんな評価をお互いが目指したいです。

また、連携をする時には、一番大事なのは、壁である。でも、この壁は自分たちがつくっている壁ではないかと山田先生がおっしゃっておられました。共感しました。私は、「連携とは自己変革」からと言っています。連携というと相手にものを求めます。しかし、相手に求めるだけでは相手は閉ざすばかりです。連携は自己変革から。「相手と過去は変えられない。自分と未来は変えられる。」これをしっかりと踏まえた時に連携はうまくいくのです。私は、教育委員会時代に、小中学校で地域との連携、社会との連携、PTAとの連携が重要だと言ってきました。そのために、自己改革をしなければいけない。自らの固定観念、閉鎖的な体質を打破しないことには相手は変わらない。その上で、「次にあなたは学生たちのために何をしていただけですか。あなたは京都のために何をしていただけののですか？」と大胆に提言していく。お互いが、そんな関係になった時に初めて、こうしたプロジェクトはうまくいくのではないかなと思います。

そのために、教育委員会時代に、私が何をしてきたかを、レジメに書いております。

次に、「京都のまち×大学・学生」について話します。

京都市には、11行政区ありますが、各行政区の市政協力委員と懇談会を行います。上京区は、次の月曜日に実施する予定です。懇談会の詳細について、区長や担当課長、係長から上京の今の課題のレクチャーを受けたときの話です。京都市の基本計画は大きな装置で検討、研究しておりますが、同時に京都市は行政区ごとに基本計画をつくろうということで、全区で区の基本計画を策定しています。行政区ごとにつくる時に、小さな学区単位で円卓会議を開いています。上京区も、新しい基本計画の策定を進めていますが、上京区では、「若者まちづくり会議」を立ち上げ、この中に同志社大学の学生さんが、たくさん参画しています。そして「学生、若者の地域における役割を果たせるためのチームを設置したらどうか」とか「地域への若者参加を促すための若者参加マニュアルをつくったらどうか」とか「地域内で地域の学生が運営するサークルをつくったらどうか」とか、「大学の掲示板やホームページに地域行事が載ったらどうか」といった意見を、学生さんたちが区役所に言ってくれています。

うれしくなりました。歴史と伝統のまちというのは、地域のあらゆるしがらみにとらわれて、ややもすれば、頭が固くなります。そこに学生さんが入っていただき、発言していただくと行政マンが言うより、ウンと影響があります。スツと入るのですね。いろんなプロジェクトがあります。山科にいくと、大学が二つあり、清水焼という伝統文化がある。山科は歴史と伝統のまちなんです。すばらしい文化遺産がある。しかし全国的に、山科を観光地と思っている人は少ない、観光客が少ないのです。宇治は観光地だと思っていますが、山科区はもともと宇治郡山科村なんです。小野小町の随心院とか勧修寺、いろんな文化遺産がありますが、そこに大学生と先生の専門性が融合した時にまちが活気づくのです。京都の歴史と伝統、すばらしい地域力、それを支える人間力、それ×大学と学生さん。その時に化学変化を起こす。それは大学にとっても学生さんにとっても、なによりまた京都の地域にとっても、京都のまちにとって、同時に日本の未来にとってすばらしいものになると思います。

京都市では、「学まちコラボ事業」とか、新たに来年度から「輝く学生応援プロジェクト」とか「むすぶネット」といった事業を展開し、大学の力、学生の力と京都の地域力を結んでさらに飛躍する仕組みをつくっていききたい。その先頭を切っているのが今回のPBLではないかと思っています。

京都に国立京都国際会館という国際会議場ができて45年になります。日本で最初にできた国際会議場であり、国立の唯一の施設であります。この国際会議場は、国から法律に基づき、京都市が委託を受け、直接の運営は、財団法人が携わっています。その財団の理事長に稲盛和夫さんが御就任いただき、本日、お披露目の会合がありました。国内外から、様々な方がこられました。この会場にも、御出席された方がたくさんいらっしゃいます。そこで、国際会議場の役割をしっかりと果たしていくことを、会議で確認しあいました。

この会議場は、京都議定書誕生の地です。私は、この12月に、COP15出席のため、コペンハーゲンに行ってきました。パリ、ニューヨーク、メキシコシティ、ソウル、香港などなど、79人の市長が集まり、世界市長気候サミット等を開催しました。世界中の人口の5割が都市に住んでいる。20年たったら7割になる。都市に住む人間が環境に大きな負荷をかけています。首脳会議では自分の国はできるだけ負担をかぶらず、相手に負担を被せようと、国益という名のもとの駆け引きが活発で、うまくいかない。しかし、この会議では、「都市に住む人間が地球環境にやさしい生き方をしよう。たとえばゴミを減らそう。」「公共交通で化石燃料を走る車から脱皮しよう。」「エネルギーを考えよう。」といったことを都市が明確な目標を持って行動する。地球上の7割の人間が、実行し、成功事例を交換すれば地球環境は前進するということを確認しました。その時に京都が果たす役割、京都への関心の高さにびっくりしました。Do you Kyoto? と言われていました。京都は「都市の名前」を越えて「動詞」になったのです。「京都」は、「環境にいいことをしていますか」を意味しています。共々に頑張らないといけないと思います。

私、後のシンジウムに参加したいのですが、京都で同志社大学も参画していただいて、専門職大学院を教育大学中心に7つの大学でつくり、そのシンポジウムがあります。鈴木文部科学副大臣もこられていますので残念ながら失礼いたします。このプロジェクトに、同志社大学の先生方の考え方に学生の皆さんに大いに期待しています。私共も頑張ります。よろしく願いいたします。ありがとうございました。

司会 ご公務お忙しいところ、ありがとうございました。

◇配付資料

ホームページを御覧ください！

(京都市 HP) <http://www.city.kyoto.lg.jp/> (門川大作 HP) <http://kyoto-daisakusen.io/>

H22. 2. 20

京都市から見た地域連携教育の可能性

京都市長 門川 大作

1 はじめに ～市長就任2年

○政策の「融合」と「共汗^{きょうかん}」で進める京都のまちづくり

○市民との「共汗」・政策の「融合」で地域主権時代のモデルを築く

今の行政の問題点 縦割り・二重行政・行政主導 ⇔ 「共汗」と「融合」

2 まちづくりは人づくりから

○今日の教育の最大の課題は、2つの乖離。

→ 「学校の学び」と「家庭生活・社会生活」との乖離

「学齢期の学び」と「社会に出てから生きていく力」との乖離

○知識を、生きて働く智恵に

→ まち全体を子どもの学びと育ちの場に。大人はみんな先生に。

大人の生き方、働き方、学びを見せ、語る。

社会体験、自然体験、「人間浴」

○学びのフィールドを社会全体へ。

→ 地域を拠点に学びのフィールドを社会全体に。

学校・家庭・地域はもとより、大学・企業等市民ぐるみの協働による、様々な体験活動を通して、勤労観・職業観、社会道徳、社会貢献、学ぶことの大切さ、社会のルール等、「人間力」を育む取組を推進。

○「学識」「見識」「胆識」を持つ「人財」の育成

→ 「胆識」は「人間浴」から

3 人財育成に京都の潜在力（京都力）を活かしきる！ ～「連携」と「共汗」が鍵

- (1) 「自然」「歴史」「大学」「学生」「文化」「芸術」「宗教」「環境」「観光」「ものづくり」「ものがたりづくり」等、様々な京都の都市特性・強みを認識し、活かし、創造する。
- (2) 情報公開と説明責任を徹底し、幅広い市民の英知を集める。
「情報」を共有することにより
「課題意識」「危機感」を共有し、それを
「行動」の共有に高め、
「評価」も共有する。(相互評価)
「成果」「喜び」「達成感」の共有へ。
- (3) 批判し、批判される関係から、足し合い、高め合う「共汗」関係へ
「共通理解」⇔「共通実践」へ。「連携」が鍵

☆ 連携とは、「自己変革」から

「過去と相手は変えられない、自分と未来は変えられる」

☆ 連携とは、「重なり合う」こと

狭い役割分担意識を越え、あらゆる政策を「融合」していく

※政策の融合例「歩くまち・京都」－「12K」

「健康」「環境」「公共交通」「子育て・教育」「コミュニティ・絆」「景観」「観光」

「経済の活性化」「危機管理」「国際」「カルチャー」「くらしの知恵」(ライフスタイル)

4 「共汗」と政策の「融合」による人づくり・まちづくりの実践

【京都市の初等・中等教育での実践の軌跡】

(1) 地域に内外に開かれた学校づくり

①基礎となる取組

- ・「知ってください」(学校便り地域版, 地域回覧, 全校HP)
- ・「来てください」(自由参観日, 始業時から終業時まで, 2~5日続けて参観日, 地域開放施設「学校ふれあいサロン」全小学校に設置等)
- ・「知恵, 力を貸してください」(学生など学校支援ボランティア, 全市で3万人)
- ・「地域へでかけます, 地域で学びます」(中学生「生き方探究チャレンジ体験」)

②「学校運営協議会」（コミュニティスクール）の設置

- ・全校に設置した「学校評議員」（H13～）を発展。
- ・京都市独自方式の「学校運営協議会」を設置。現在 161 校（市立学校園の約半数，全国の 1/3）
 - 学校運営の良き「ご意見番」であり「応援団」
 - 「企画推進委員」が共に汗を流す活動に参画
- ・「平成の番組小学校づくり」，「ほんまものコミュニティスクール」
 - 「良き町衆を育てる」「子どもは地域のかすがい」

③外部評価を含めた「学校評価システム」の全校実施（H15～）と公表

- ・学校，家庭，地域，生徒の当事者評価を大切に，自らを振り返り，互いに高め合う制度，「子どもの学びと育ち全体の評価システム」に。
- ・全国初の学校評価を含めた「京都市行政評価条例」制定（H19.6～）

(2) 生き方探究教育の推進

ア 生き方探究チャレンジ体験（H12～）

- ・中学 2 年生 1 万人が 3,700 事業所の協力を得て連続 5 日間の社会，職場体験。

イ「生き方探究館」（経済界，学生等ボランティアの参画で運営）での取組

①スチューデントシティ（小学生）・ファイナンスパーク（中学生）

- ・統合による元中学校校舎を活用し「生き方探究館」開設。
- ・ジュニア・アチーブメント（世界最大の経済教育団体）と連携し，民間と共同実施。H19.1 開設。銀行や商店，新聞社，区役所等を企業の協賛や延べ 3800 人のボランティアにより 設置，運営。
- ・社員とお客（市民）両方の立場の経験や収入と支出を踏まえた生活設計の構築を通して，働くことの緊張感や達成感，人の役に立つことの喜びを実感する体験活動。
- ・各学校で 13～15 時間の事前学習も。京都ならではのものに。
- ・H21 小学校全 179 校（5 年生），中学校の約半数 33 校，約 1 万 5000 人が学習。

②まち全体をものづくり体験の場に～京都子どもモノづくり事業～

- ・京都企業の創業者等の「生き方」から学ぶ「京都モノづくりの殿堂」創設（H21.2）殿堂で学んだモノづくりの原理や仕組みを体験できる「モノづくり工房」。
- 市立小学校が学習を実施（39 校，4～6 年生児童約 2,600 名）
- ・京（みやこ）少年モノづくり倶楽部（大学・企業・NPO 等の協力 15 事業）
- ・伏見・洛陽工高に「ものづくり工房」を設置し，小中学生対象のモノづくり体験講座を実施。

【京都のまち×大学・学生】**(1) 大学のまち京都・学生のまち京都****① (財) 大学コンソーシアム京都**

- ・50の大学・短期大学及び京都市で組織する全国でも類を見ない、圧倒的規模のコンソーシアム。
- ・500を超える講義の単位互換制度を大学の枠を超えて受講可能。

② 学生主体の「京都学生祭典」

- ・学生が企画から運営までを行い、京都の大学、経済界、地域、行政がオール京都で支援。
- ・第7回京都学生祭典では、22万7,000人が来場。

③ 留学生1万人計画

- ・留学生4,500人を1万人に。
- ・「京都市国際化推進プラン」(平成20年12月策定)
「大学のまち京都・学生のまち京都推進計画」(平成21年2月策定)
における重点施策として推進。

④ 「Student Days (学生を京都市文化施設へ無料招待)」の実施

- ・京都の伝統的な文化に触れる機会を広げるため、平成21年度から実施。
無鄰菴、京都市美術館、京都市動物園、元離宮二条城へ学生を無料招待。
(10月9日～12日の4日間)

⑤ 学まちコラボ事業 (大学地域連携モデル創造支援事業)

平成16年度から、大学コンソーシアム京都と協働で魅力ある地域づくりや地域の課題解決に向けて、大学・学生と地域が一体となって取り組む事業を広く募集し、これまで計51件に助成金を交付。うち同志社大学は3件を実施。

(採択された事業)

地域の冊子やマップの作成、地域資源の発掘、空き家の活用、町衆文化の再創造、安心安全な地域づくりなど。

⑥ 「輝く学生応援プロジェクト」の創設 (平成22年度)

キャンパスプラザ京都に整備する「学生の活動拠点」において、大学の枠を超えて活動する学生による、京都のまちの活性化につながる活動を支援する。

- ・活動の場や情報の提供、相談、活動内容の発信等総合的な支援
- ・まちの活性化につながる活動に対する助成や表彰による支援
- ・学生の活動と地域のニーズとのマッチング、連携への支援 (※)

⑦ むすぶネット (仮称) (学生・地域連携ネットワーク) (※)

発表の場を求めている音楽や踊りなどのサークル団体と、地域の地藏盆などに学生参加を求める自治会等のマッチングや、地域の課題解決に大学や学生の協力を求

めている地域と大学で学んだことを実践するフィールドワークの場を求めている学生を繋げることにより、さらに学生のエネルギーをまちの活性化、京都のまちづくりに活かす。

⑧70の大学等と京都市教育委員会による共同研究等の協定締結

約2,000人の学生が小・中学校において各教科やクラブ活動の指導補助で活躍。共同研究や教員研修・養成など初等中等教育段階等で具体的連携が進みつつある。個別大学との連携、小大連携プロジェクト、高大連携 など

⑨「京都学生消防サポーター制度」（平成19年12月創設）

197名の学生が登録。防火防災の知識や技能を身に付けることで、地域の災害対応力の強化に貢献。

⑩大学と連携した教員養成支援システム

- ・教員養成支援室設置（H18.4月）
- ・京都教師塾開設（H18.9月）※50以上もの大学から入塾
- ・第4期京都教師塾塾生465人、同志社大学生21人も入塾
- ・塔南高校「教育みらい科」設置（H19.4月）
- ・連合教職大学院の開設（H20.4月）
- ・全国に例のない同志社等の国立・私立の全8大学が連携した日本で最初の専門職大学院

⑪「京都教育懇話会」（H20.5～） ～産学公・地域連携で初等中等教育を支援～

企業の業態、また産学公や校種、公立私立等の垣根を越え、教育・人づくりについて果たすべき役割について議論。

- ・第1回は北城恪太郎氏（日本IBM会長・経済同友会代表幹事）他、第2回は張富士夫氏（トヨタ自動車会長）他を講師に招き、子どもたちのために大人社会は何ができるかをテーマに「教育創造フォーラム」を開催。
- ・平成22年5月15日に、第3回「教育創造フォーラム」開催決定。

⑫上京歴史探訪館の運営

上京区民・同志社大学・上京区役所が協力して、上京に関する歴史・文化情報やイベント情報を広く発信することや、新たな観光資源を掘り起こし、魅力的な観光資源として紹介する「上京歴史探訪館」を運営。

5 おわりに

- 同志社大学PBL推進支援センターへの大きな期待
- 京都市の教育改革 … ソーシャルイノベーション
- 地域主権時代に、京都の歴史と伝統に支えられた地域力、人間力を活かし、産学公の連携で、新しい「人財」育成のモデルを京都から発信。

■事例報告1 小学校における試み～小大の取組みとして

京都市立朱雀第二小学校・同志社大学

2009年度プロジェクト科目「演劇で子ども達と学ぶ 企画実践プロジェクト」

京都市立朱雀第二小学校 教諭 吉田 綾美

同志社大学商学部3年次生 谷井 佳輔

同志社大学社会学部2年次生 後藤 いずみ

司会 それでは事例報告1 小学校における試み～小大の取組みとして。京都市立朱雀第二小学校・同志社大学。ご報告は2009年度プロジェクト科目「演劇で子どもたちと学ぶ、企画実践プロジェクト」活動にご協力をいただきました京都市立朱雀第二小学校教諭吉田綾美先生、プロジェクト科目履修生の本学商学部3年次生、谷井佳輔さん、社会学部2年次生、後藤いずみさんによる報告です。よろしくお願いします。

谷井 同志社大学プロジェクト科目「演劇で子どもたちと学ぶ」のリーダーをやっていました商学部3年生谷井です。



吉田 朱雀第二小学校教諭の吉田です。

谷井 僕たちのプロジェクトがどういうことをやっていたかを簡単に紹介したいと思います。

後藤 プロジェクトメンバーの社会学部社会学科2回生の後藤いずみです。私からこのプロジェクト科目が、どのようなプロジェクトか、今年度はどのような活動をしたか。突然ですが、皆さんは演劇教育という言葉聞いたことがあるでしょうか。演劇教育という言葉が私たちの活動のキーワードとなるものです。演劇教育とは、文字どおり子どもたちの教育に演劇を利用する方法のことです。昨今、インターネットやテレビゲームの普及による子どもたちのコミュニケーション不足が問題だと指摘されています。そこで注目されたのが演劇です。相手の話をよく聴いて、自分の思いを全身で表現する。演劇はこういう基本的なコミュニケーションをシミュレートすることに特化した道具だといわれています。そしてまた演劇教育の持つもう一つの魅力は実際に議論されている社会問題を、その劇のテーマで演劇を創作することによって、その劇をする子どもたちが、その問題を演劇をとおして疑似体験できるところにあります。それらの問題の重要性を理解して、現状把握や対策を考える大きなきっかけになるわけです。



そしてこのような演劇教育を大学生が企画し、実際の教育現場で実践しようというのが私た

ちのプロジェクトの大きなテーマです。それではここから今年度の具体的な活動について説明していきます。今年度は京都市立朱雀第二小学校5年生の皆さんと劇を創作して昨年11月学芸会で発表しました。今回採り上げたのは環境問題です。まず子どもたちを水質汚染、ごみ問題、森林破壊、温暖化の4つの班に分けるところから活動が始まりました。しかし劇の創作に入る前に、私たちは子どもたちと一緒に環境問題について調べ学習をするところから始めました。4つのテーマに関して紙芝居を作成して子どもたちに読んで聴かせる。それをまた発展される形で子どもたちが自分で調べ学習をするという時間を設けました。子どもたちの発表で具体的にどのようなことが、どのくらいの早さで起こっているのか。それをくい止めるにはどのようにすればよいのか。紙芝居の内容を発展させた内容となっているのが、とても印象的でした。

その学習をもとに大学生が台本を完成させ、本格的に劇の創作に入っていました。学生主導で授業をしていたので、子どもたちができないこと、セリフがつい早くなったり、覚えられなかったり、大きな声がでなかったりするところは指導しましたが、それ以上に劇を創作するにあたって、子どもたちが「こういうふうにしたらいんじゃないか」と意見をどんどん言ってくれて、私たちが子どもたちを指導するより、私たちと子どもたちと、先生との三人四脚の劇の創作になったと思います。

そして本番の11月の学芸会では多くの方に劇を見ていただいて、お褒めの言葉をいただき、大成功をおさめました。ここまでは今年度のプロジェクトの概要になります。では本日はその5年生の担任の吉田先生のお話を聴いていただきたいと思います。

谷井 今日僕が吉田先生に質問をしてお答えしていただく形で進めていきたいと思っています。僕たち朱雀第二小学校以外にもこの話を企画として持ち込んだんです。その中で他の小学校ではどうしても断られてしまうことが多くて、それはなぜかという、忙しい。カリキュラムが決まっているといわれて制約があるから絶対に受け入れてくれなかった。その中で朱雀第二小学校が、なぜこの企画を受け入れたのかということをお聞きしたいと思います。

吉田 初めてこのお話をいただいた時に、演劇でコミュニケーションをとる、教育活動に活かすということ話をされた時、あ、そういう視点があるんだと思って、すごく驚いたこと。時間的なことは、小学校で話題になっているゆとり教育の中の総合学習が年間75時間あります。うちの学校の5年生の総合学習のテーマが環境問題だったんです。あ、丁度それでやったら私と子どもたちだけで取り組むより、大学生のお兄さん、お姉さんたちと取り組んでいった方が、子どもたちにとっても力にもなるだろう、最終的には学芸会が11月にありますので、そこで自分たちが調べたことや育っていった力が発表できたらいい機会になるのではないかと思います、ぜひうちの学校の子どもたちでよかったと引き受けましたという次第です。

谷井 総合学習の時間を、うまくこの企画で活用していただいたということですね。

吉田 そういう意味では総合学習の時間があってよかったなとは思いますが。

谷井 僕たちのプロジェクトで演劇教育というところですが、演劇教育の効果とは何か。僕たちが考えていたのは演劇を学んでいくことで、自分の思いを伝える、相手の思いを受け止めるのに手段として演劇がいいのではないかとということで演劇教育を押し企画としてお話ししましたが、吉田先生は演劇教育の効果について、どのように感じられましたか？

吉田 もともと子どもたちが考えた劇のようなものを、幼稚園でも生活発表会でやっているんですが、教育的にコミュニケーションをどのようにしているかという意味で見ると、よく話をするようになっていて、学級会での活動ではなく、お互いにいろんなことを思っていることを話しあえる場として劇をしようということで、友だち同士の話し合いが活発になってきました。相手に伝えよう、私はこうしたいんだという気持ちが伝わってきたので、演劇を通して、一つの目的を持ってお互いに話しあうのはいい効果があったと思います。

谷井 普段あまりしゃべらない子どもが演劇では意見をいったり、ということが、よく見られたなど。プラスの効果があったと思いますね。

吉田 小さい声でしかしゃべらない女の子もいましたし、皆、活動の中で、台詞の言い方とか、動作を学芸会の時、バツと言ったので、すごいなと思いました。おとなしい子も、こんなことができるんだという男の子もいまして、結構、演劇って、うまいやね、この子はと思ったし、たくさん、いいことを発見することができたのでよかったです。

谷井 次に実際、僕たちが主体となって子どもたちに演劇を教えていきますが、僕たちが最初に来た時、子どもたちは喜んでくれて、大学生のお兄さん、お姉さんたちが来たとなる中で、どうも友達感覚として接してくる子もいて、授業にならなかつたり、呼び捨てで呼ばれたり、礼儀があまりなっていない子がいることもあって、いろんな問題点もあったと思いますが、授業風景をみられて、教師の立場から、どう思われましたか？

吉田 ほんとに楽しんでいて、次の時間が来るのを楽しみにしていました。教師ではないので、友だち感覚で話をするので、ある程度、何のために一緒にやっているかを、つい忘れがちになります。楽しいことばかりが先に言って、なれなれしいというか、そこはそういう言い方をしたらあかんと違う、ということがありました。その兼ね合いで難しいなと思いました。

谷井 授業を見られて感じられたこととか。

吉田 そのへんのところが、もう少しきちんとできればいいなと思います。お互いに伝えきれていないところがあったのではないかと。「今日はこんなことをするよとか、こんなことをするから、これを頑張ろうね」ということが子どもたちになかなか伝わっていなかった。ワーンと何かして、今日はこんなことをしたな、ということで終わることがあったので、今日は台詞を頑張ろうねとか、今日は大きな声を出して動作するよ、という目当てが明確に出ていたら、もうちょっと話ができただのではないかなと思いました。

谷井 授業をよくするために学生も念入りに授業を準備して子どもたちに伝える努力をするべきだったと。

吉田 明確に子どもたちにわかるようにしていけばよかったのではないかと思います。

谷井 発表会が11月中旬。それから3カ月たって、子どもたちにいい影響、今の学校生活の中で、演劇教育を終わった後の影響は何か見られるところはありますか？

吉田 悪い影響は感じませんが、演劇を通して、今の授業の中ではやりません。忙しくて昔はお楽しみ会もしていましたが、それをとる時間もなくて追われています。うちの学校は算数を重点において授業していますが、その中で自分の考えた事を相手に伝える、授業の中で問題解決をするのに、いかに自分が考えたかを互いに話し合っただけで授業を組み立ててやっているんですが、演劇の後、自分の考えを「私はこの問題をこういうふうにして解決した」とか「この問題はこういうふうにやったらいいのではないか」と話をするのを、よくするようになってきました。最初はわかっている子どもだけとか、友だちの話を聞いても、ああそうかということで済んでいたのが、お互いにコミュニケーションをとるとか、話をしたら相手を説得できるんだとか、少しわかってきて、普段の授業の中で生かせるようになってきているなどと思います。

谷井 小学生のコミュニケーション能力も向上したと思いますが、大学生も授業に行く前に「こうやっていこう」ということで大学生も小学生にさせられるようにコミュニケーション能力が上がっていったことも感じていて、相乗効果があったと思いますね。

今回、同志社のプロジェクト科目ということで小学生と大学生が連携していくという、あまりないことなのかなど。授業体系ですが、小学生と大学生が組んで授業していくためには小学校、大学、社会の仕組みがどう変わっていったら、こういう連携がスムーズにいくのかということ。

吉田 難しいですが、大きなテーマですが、小学校は時間的な余裕がないので、できれば総合学習とか、カリキュラムの中にそういう時間がとれるように、時間的な余裕がほしいなどと思います。大学の方でカリキュラムを組んでいただける機会があったら、一緒にできることはいいことだと思います。大人と子どもだけではなく、間に学生が入っていただくと子どもたちの取組方が違うので、ぜひ入っていただきたいと思います。なかなか演劇についての専門的なことは知りません。学生と一緒にやった時に、発声の仕方、子どもたちは教えてもらっています。「大きな声を出しなさい」「こっちまで聞こえるように声を出して」といぐらいで、専門的に演劇を教えるあげるとか、こういうふうに表示したらいいかできないので、教えていただけるプロの方と一緒に取り組めるようにしていただけたらと。小学校でこんなことをするから、学校単位でやってください、担任の先生がしてくださいといわれると、時間的なことも難しいので、もし教育的にしていられるならば、時間的なことと、人材、プロの専門家の方が来ていただいたら安心して子どもたちを任せるか、私たちも勉強になると思います。そうなればいいなどと思います。

谷井 プロジェクト科目をとっているメンバーは演劇に詳しいメンバーが揃っているわけではなく、演劇をちょっとずつ体の中で感じながら、小学校に行ってやってみよう。行政的な面で指導しづらいところがあったので、学生でもなく、教師でもなく、新たに地域のボランティアの感じでもなく、プロの教えてくれる人がいたらいいということですね。僕たちはこのプロジェクトをやってきて、小学生の成長が目標でしたが、自分たちも成長していきたい。こういう企画があることが楽しくて、受け入れてくださった朱雀第二小学校に感謝しています。演劇をやって学芸会で成功するという、普通の学生生活で授業を聞いているだけでは得られない経験を与えてもらい、同志社大学のプロジェクト科目は、僕はいいいものだと思っています。これが小学生と大学生が連携していけばもっとよくなっていくのかなと感じています。ご静聴ありがとうございました。

司会 ありがとうございます。2番目の事例報告に移ります。

■事例報告2 生徒・教諭による報告～中高の取組みとして

大阪桐蔭中学校高等学校

中学校国語科 国語科から「プロジェクトワーク」へ

大阪桐蔭中学校高等学校 国語科客員講師 田村 かすみ

大阪桐蔭中学校3年生 中村 朱里

大阪桐蔭高等学校3年生 西原 輝将

司会 事例報告2 生徒・教諭による報告～中高の取組みとして。大阪桐蔭中学高等学校。ご報告をいただきますのは大阪桐蔭中学校高等学校国語科客員講師、田村かすみ先生。大阪桐蔭高等学校3年生、西原輝将さん。大阪桐蔭中学校3年生、中村朱里さんです。

田村 今日はいくまでも中村さんと西原くんのスピーチがメインですので、私は前座を務めさせていただきたいと思います。

先日、高校3年生の生徒が、こういうことをつぶやきました。「理想の先生はね、正解を僕にきちんと丁寧にわかりやすく教えてくれる先生。僕は大学受験をしている時に、いろんな先生が『頑張っってね、応援しているよ』と言ってくれるんだけど、必要な力を僕に実際に授けてくれる先生はいない。僕は孤立していて辛い。」。それからある生徒は「勉強ってというのは難行苦行や。その勉強がなぜ、どんな力をつけようとして、それを僕に強いるのかがわからない。教育の目標やどんな力をつけようとしているのかを最初に僕がわかったら、もっと勉強って楽しかったかもしれないのに」。

この話を聞いて、私は愕然としました。まず正解があるという認識を持っている、大人の皆さんはよくよくおわかりだと思うんですが、世の中に唯一の正解って、ありますでしょうか。もしかしたら最適解はあるかもしれない。もしかしたら正解もあるかもしれない。でも世の中はすべて正解があると思っていること、それに私はほんとに驚きました。また、生徒自身が、なぜその教育プログラムがあるのか、その目標を知ることがなく、ただ一生懸命勉強させられているという現状、これは私たちがやってきた教育の責任です。

中等教育を私たちは担っているわけですが、私が思う教育の壁というのは4つあると思います。一つ目、教科に縛られて教科の中には固定した指導方法がある壁。二つ目は教室を越えることが非常に困難であるという壁。三つ目は教員の一斉授業で知識を効率よくつける、技術をつける、それが学力だという固定概念という壁。そして四つ目は進路の壁です。生徒には大学受験に入る力を保障しなければなりません。その壁を越えるために私に何ができるだろうかと考えました。

私は国語科の教員をしております。主に中学校を担当しておりますが、国語科の指導要領を読み見返しました。当時、PBLという教育手法があることは全く知らなかったもので、手さぐりで、もう一度国語科の授業を再構成してみようと思いました。私ができることは3つです。



一つ目は7つの教育目標を独自に設定すること。学習指導要領の中も入っている教育目標を7点に整理しました。これなら国語科の教育目標を達成しながら、独自の教育目標を導入できます。「五感の活性化をする」、「地球規模の問題に関する知識を持つ」「多様な価値観の存在を知る」「自己肯定感を持つ」「問題解決の為の具体的な行動をする」などがその中に入っています。

二つ目は教育方法です。さまざまな言語活動を組み合わせるわけです。これは劇をつくるとか、感想文を書く、絵を描くから始まって、最後にはシンポジウムを企画する、座談会を計画する、ワークショップを開催する、共同研究をする、卒業プロジェクトを実施するなどといった大きくて複合的な形になりますが、これを3年間でいろんな段階で繰り返して行います。

そして三つ目が多様な場の設定です。英語で行われる人身売買の国際シンポジウムに中学2年生を連れていったり、JICA大阪で研修員さんと1日を過ごしたり、JICAの国際教育エッセイコンテストに参加したりしました。2005年には45,000通の中から第1位である最優秀賞を頂戴しました。2008年の優秀賞、52,000通の中から全国で第4位だったんですが、当時中2だった中村朱里さんが受賞されています。そのような校外の場を利用する。いろんな活動に教室を飛び出して参加する場の設定を試みました。

実は私、同志社大学の卒業生でして、文学青年の面持ちが残る山田先生に教えをいただいたことがございます。山田先生は覚えていらっしゃるかどうか、当時、3年生だった私たちは国立文楽劇場につれていってもらいました。山田先生は近松のご専門でしたけど、学ぶということは教室の外に出る、そして体験するということだと山田先生から学びました。

私が変わった国語の授業をやっているということで、同僚たちとどうやったら教科学習の壁を超えられるかという勉強会をやることができました。その中から他教科と連携して単元を組んでいこうという実践が生まれました。体育科、家庭科と合同で単元を組むのです。そして、中学校高等学校を合わせた全校規模で「プロジェクトワーク」という時間が生まれました。これは、総合的な学習の時間に子どもたちが学年とクラスを越えて、多彩なコースの中から子どもたちが好きなコースを選んで、6 学年の生徒が体験型の学習を共同で行う授業です。カリキュラムマネージャーとしてこの実践を創りだした堤が、誕生の経緯をお答えしたいと思います。

この中でいろいろ興味深いことがありました。当時私は「生徒が課題を発見してプロジェクトを実施する」という、プロジェクトのごく初歩のプロジェクトを開いていました。その中で、ディベート甲子園に出るというプロジェクトを実施した子どもがいました。その生徒はもちろん、当然私もディベートという競技に関しては素人でした。近畿地区予選で闘ううちいろんな大学の先生、先進的な取組をしている中学校の友だちと交流を深めて、もっとディベーストをしたい、週一回のプロジェクトでは足りない生徒たちはどんどん動き始めました。クラブメンバーを見つけて同好会をつくって、そしてついにクラブをつくってしまいました。今やそのクラブ中高をあわせて50人ほどおります。大きなクラブに育ちました。現在クラブを支えるのは学校だけではなく、お父様、お母様が保護者会もつくってください、皆で子どもたちをいろんな面でサポートしています。子どもたちがこういう支援をして下さいとリクエストし、大人の私たちも協力しようとしています。

もう一つ面白いのは機械体操部。これも生徒が創設しました。企画を立てたのが中3生でしたが、「予算、これくらいいります、コーチはこの人。」と設立趣旨書を書きまして、校長先生や、堤先生のところに行って「先生、僕たちはこんな計画をしました。実現をお願いします。」ということを訴えました。学校長がこれも聞き入れてくれ、機械体操部が誕生しました。

今まで、とてもいいお話をしました。でも光があれば影もある。私たちの取組には、まだまだ壁があります。

私自身が感じている壁というのは「評価」という壁です。私がやっている国語科の「生きる力をつける国語」というのは、まだ国語科の評価法でしか評価することはできません。「プロジェクトワーク」もそうです。現在44チームほど中高あわせてあります。農業体験、ロボットをつくる、歴史新聞をつくる、英語でディベート、住道まち探検などです。そのプロジェクトワークの評価のあり方も、きちんと検証していかなければならぬだろうと思っています。

さてそろそろ前座を終わらしましょう。今からお話してくれる中村さんと西原君の説明に移ります。

中村さんは中2の時、JICA国際協力エッセイコンテストの優秀賞として、全国第4位をとりましたが、彼女は中1の時からいろんなプロジェクトを運営しています。中1の時にはフランス在住ムスリムの女性のスカーフについて、どのような規制がされているのかを調べた「スカーフ事件プロジェクト」。中2で取り組んだ放置自転車を途上国に送るプロジェクト。彼女について、私がすてきななあと思うのは、プロジェクトだけではなく、彼女自身をもデザインしていくことを喜び、自分の成長を確認しながら将来へ希望をつないでいく点です。楽しみにしてください。

西原君はディベート部の初めての卒業生です。クラブ活動はプロジェクトそのものです。ディベート部は立論を準備する段階で、十分なリサーチが必要です。友だちとパートをどのように分けるか、誰かが試合の中でどのようにフォローするかという、仲間と共同して一つの作品をつくっていく長いスパンの作業なのです。彼は引退後もエルダーとして後輩の指導もしっかりしています。さらには「大学受験突破プロジェクト」を自分でつくって、さっさと大学に合格してしまいました。彼が何を主張するか楽しみです。さあ、それでは一緒にお話を聴きましょう。

中村 私が本日、お話ししたいことは大きく分けて 2 つあります。

私自身が体験した PBL を話したいと思います。

私はプロジェクトワークで1年生の時、「ディベート」に入りました。そこで大勢の人前で自分の意見をはっきりと述べることを学びました。ディベート部担当の田村先生より、ディベートの話と同時に、ご自身が行っておられるたくさんの国際協力の話を聞いているうちに、私も興味を持ち始めました。

その後、国語の授業の中で「幸せ自転車計画」というプロジェクトを立ち上げました。日本国内の駅周辺の放置自転車や駅の貸し出し自転車で、まだ使えそうなきれいな自転車を、自転車がない発展途上国に送り届けるプロジェクトです。中学2年生の時は、インターネットで自転車を送っている団体をたくさん見つけました。調べた内容や自分たちのプロジェクトを完成させていくために、きちんと文章化していこうと思い、文章にまとめました。それをJICAの国際協力エッセイコンテストに送り、幸せなことに優秀賞までいただきました。詳しくは資料の「私たちの自転車計画」という作文をお読みください。

副賞でマレーシアへ海外研修に行くことになりました。そこで現地の人とふれあい人と人とのつながりを感じ、電気やガスのない一見、不便な生活の中で人々の心のあたたかさを感じ、言葉の壁を越えて同年代の友だちもできました。とても自分にとっていい経験になりました。



マレーシアに行ったことで国際協力というものがどんなに大変かということを感じました。その上、どんなに意義があるかということも知ることができました。

それと同時に夢というほど大きなものではなく、まだ漠然とした考えでしかないのですが、青年海外協力隊に入り、少しでも発展途上国の人々の生活を楽になるための協力がしたい、世界が平和になる為に、あらゆる国際協力をしていくという目標を自分の中で確立することができました。

私は国際協力に出会い、たまたまそれに魅力を感じ、自分の課題として取り組んでいくことができました。将来、自分がどういう人になりたいのかということを実際的に考えることができ、大きな一つの目標ができました。自分のやりたいこと、なりたい姿、目標が見つかると、自然と自分は今、何をすべきかわかってきました。私の場合は、PBLをすることによって判断力や行動力、決断力、今自分にとって一番すべきことは何かということ考えることができるようになりました。しかし、今の同年代の人は、なぜ自分が勉強しなければならないのかということがわかっていないように思います。勉強をする意味がわからないと感じている友だちがたくさんいます。

二つ目に私が思うことは、プロジェクトワークについてですが、学校側の反応はどうかということです。学校の先生方は、机の上での勉強する時間を割いてしまうと、生徒の成績が下がるのではないかと不安があると思います。学校は新しい教育システムにおいて少し逃げ腰の部分があり、行動力や柔軟性に欠けている部分を感じます。これは私自身の課題でもあるのですが、今、しなくてはならない事は、特に進学校と呼ばれる学校に通っている限り、成績をよくすることは必要だと思えます。大人の方が心配されるように、今自分がしなければならないのは「勉強」だということは感じています。それはもともとだし、私のこれからの課題は勉強と国際協力というプロジェクトを立ちあげていくこととの両立が、私のこれからの課題です。

友だちも新しいことに一歩踏み出す勇気が、まだ出ない人が多いです。一人の例を上げますと、弁護士になりたいという夢を持つ親友がいます。弁護士というのはどういうものか、きちんと理解し、弁護士は大変な職だということも理解し、もっと詳しく知りたいと思い調べることで、職に魅力を感じることが出来ます。弁護士になりたいということがただの夢ではなく目標となり、その人にとって弁護士という職業が、身近な存在になり、勉強を頑張ろうとするようになります。このように自分で切り拓いていく力が、まだ備わっていない人が多く、夢や目標を持っているのに芽を出さないまま枯らしてしまうという学校生活を送っている友だちを、よく目にします。

だからこそ今、学校の授業の一環として生徒一人ひとりの PBL を見つけて、それに向かって勉強していく方が効率が上がるのではないかと。そしてそういう場も設けてほしいというのが私たち生徒の願いです。その場こそが、大阪桐蔭で行っているプロジェクトワークではないかと思えます。そうすれば、最終的には生徒の大学進学に対する考え方が変わっていくのではないかと思いました。偏差値の高い大学に入ることが目標だったのが、これはもちろん大事なことだと思いますが、一番は自分のやりたいことを思う存分に発揮でき、自分にあった大学に入ることが目標となり、周りに流されない自立した人間性を養っていきけるのではないかと私は考えました。

最後までお聞きくださりましてありがとうございました。

西原 自分の経験から今の自分が生徒として思っていることを簡単にしゃべらせていただきたいと思います。田村先生から受けた指導は、従来のものと全く違うものでありました。ディベートプロジェクトがクラブに昇格した2007年から3年間、ディベート部に所属していましたが、そこでは理論的な思考能力とか、情報収集、リサーチ能力はもちろん、自分のできないことを味方に補ってもらい、そのかわり自分も味方を助けにいくということとか、もっとそれ以上に一番多かったことは「自分はこういうふう考えている」と解答は出せるんだけど、正解が出せないという問題、課題について、いろいろな視点、価値観で、自分なりの、その場にあった解答を出す力をディベートというものの中で見つけました。この自分なりの答えを出せる人を目指すという、このことを入部当初から田村先生に言い聞かせられてきた言葉でもあります。田村先生から受けた、従来とは違う指導を受けた自分を振り返って試している自分が、今ここにいます。



ここで今、話されているPBLを目指す生徒像は、非常に素晴らしいものだと思います。ですが、その一方で、それよりも前に従来通りの、今までの学校の勉強というものは何を指していたのか、これが置き去りにされているような気がします。そもそも生徒自身が勉強し続けてその先に何があるのかを実際にわかっていない。知らない。勉強し続けていった結果、自分はどうなるのか、そもそも、なぜ勉強するのか。生徒自身がこの答えを自分なりに出せていない。知らない、わからない。そしていつのまにか勉強の先にあるものが大学受験というものにすり変わってしまって、という現状が、今、ここにあるという気がして仕方がありません。京都市長が言っていた学校の勉強と実際に社会に出てたら学ぶことは、大きくかけ離れている原因は、ここにあるような気がします。ではこの原因、生徒自身がどんな自分自身を勉強で目指せばいいのかを自覚していない、あるいは知らない、わからないということ、これをどうしたらいいのか。自分の周りでも「将来の夢は？」と聞かれて即答できる人はほとんどいません。さらに「どんな人間になりたいのか？」と聞いて答えられる人は、もったいません。よしんば答えられたとしても「やさしい人になりたい」とか「面白い人を目指したい」とか、すごく曖昧なイメージでしか答えられないんです。

話は少し変わりますが、先日、このシンポジウムの準備の機会があって文部科学省の言語力育成者会議の配布資料を見ることがありました。その中では教科や領域ごとに基礎を踏まえて、指導方法とか、発達段階に応じた生徒への配慮事項とか、教師側のマニュアル、教育意図がびっしりと丁寧に書いてありました。ここにいらっしゃる先生方も、そういう類のものには目を通して一度はごらんになって、あたりまえのようにご存じのことで、今更話すものではないと思いますが、生徒の側からしてみれば、それは常識ではないんです。どういう指導を受けるのか、どんなことを目指されて教育されているのか、この教科は、どういう意図で設定されているのか、こういうことを生徒自身は全く知らされていないんです。その文部科学省の指導の要項も先生からは自分たちの目指していく生徒のための教育は、こういうふうに言葉で表現できるんだと思うはずですが、それでも実現しない。思い通りにいかない。現実とのギャップに苦しんでいる。そのギャップの原因は、渦中の教育を受ける側の生徒自身が、もともと何を指して教育されているか、これがわかっていない。知らされていないことが原因だと、今の自分は考えています。もちろん大学受験のためのものとしてすり変わってしまった今の従来の学問、教育、効率いい知識注入のための指導方法という方法にも改善すべき点はた

くさんあります。でもそれ以上に自分が思うのは、今の教育の方法が生徒の側からしてみれば、後出しジャンケンのような、こういう印象を受けて仕方ないんです。

先の指導要項をもとに先生側の方針や教育意図や配慮事項も、これはつつみ隠さずに生徒の側にもオープンにしていけば、もっともっと現実に生徒の側が、その内容を完全に把握して理解はできなくても、自分が目指すべき場所はどこな人間になればいいのか、どういうことを目指していけばいいのかという目標が明確に示される、なぜ勉強しなければいけないのか、なぜ勉強するのか、勉強することの意味は、そこにあると思います、生徒にとっての。自分はPBLも、もともとの学校の教育も、その目指しているところを生徒自身に明らかにしないならば、その効果は、教える側、目指す側、マネジメント側、先生の側から意図しているものと生徒の側で受け取って現れてくる効果には差が出たり、ギャップがあったり、中身、効果が変質したりすることは当然のことだと思います。PBLも生徒自身に今、ここで話されている意図を生徒に、ずっと明らかにしていかなければ、制度の側からしてみれば、単なるガリガリ勉強の余暇としてしか、とらえられないのではないかというのが、これが自分の今の一番の直面していることであります。

最後にまとめとして今の自分の考えを言わせていただきます、すべての生徒に合致する王道的な教育のマニュアルは、システムとしてはつくれないものだと思います。当然です。でも少なくとも、すべての生徒にどんな自分を目指せばいいのかという目標地点を提示、明示、もしくは自覚させる、知らせることで、その一人ひとりの生徒自身が、どんな自分を目指せばいいのか、具体的な自分にあつた経路設計を行えるのではないかというのが自分の考えであります。少なくとも今、自分が田村先生からディベートを通して、こうやって2007年から今まで賜ってきた指導というものの中では、自分はそうでありました。以上が今の自分の生徒の側からの考えです。最後までおつきあいいただき、ありがとうございました。

田村 教師としてはほんとに痛いところを、改めて十分に、ここで受け止めたいと思いました。最後にもう一度、西原君と中村さんにあたたかい拍手をお願いします。ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。

■事例報告3 大学生による報告～小大の取組みについて

同志社大学・同志社小学校

2009年度プロジェクト科目

「わらべ歌あそびを通して子ども達に京のこころつなげるプロジェクト」

同志社大学 文学部4年次生 竹澤 啓二

同志社大学 法学部4年次生 星野 康平

司会 それでは次に事例報告3 大学生による報告～小大の取組みについて同志社大学・同志社小学校。報告者は2009値とプロジェクト科目「童歌遊びを通して子どもたちに京のこころをつなげるプロジェクト」履修生の本学文学部4年次生、竹澤啓二さん、法学部4年次生星野康平さんです。

星野 「わらべ歌遊びを通して子どもたちに京のこころをつなげるプロジェクト」というプロジェクト科目の一つの受講生であります。星野です。

竹澤 このプロジェクトのリーターをしていました文学部4回生の竹沢です。



星野 先程の中学生、高校生のお話がすばらしく、大学生である僕らが中学校、高校の時、こんな難しいことを考えていなくて、中学、高校と一緒にだったんですけど、バスケットをしていて、外でワア、キャア言うていたのに、すごいなと思って。ああいう発表ができるかどうかわかりませんが、できるだけシンプルにやっていきたいと思います。

わらべ歌プロジェクトを同志社小学校と一緒に活動しました。具体的にはわらべ歌プロジェクトと同志社小学校が何をやるねん、とイメージがわきにくいと思いますので、本日は大学生の目線から私たちがこういうことしてきたんだよ、ということ、どういう苦労があったか、小学校と大学の連携についてのいいところ、悪いところをお話していけたらいいと思います。話の流れとして小学校がチャレンジウィークという、1週間、何か新しいことに挑戦する機関があり、どういうことに挑戦したのか。そのチャレンジウィークにいたるまで大学生がどういう準備をしてチャレンジウィークに結び付けたか、その活動を具体的に知っていただき、その中での苦労など。私たちの活動の後、小学校と大学の連携によって何がいいことがあるか、どういう問題があるかを考えてみたいと思います。

同志社小学校にはチャレンジウィークがありまして、毎年、式に1週間、授業ではできない新しいこと、今までやったことがないことに挑戦して、1週間の最後に全学年の前で発表します。そこでわらべ歌に関する発表をしようと。一緒におじゃみをつくっているところ。普段授業ではしないことに挑戦していこうと。小学生はわらべ歌遊びの心をつなげる、いろんな人たちとつながったり、京都のいいところを知ろうということで積極的にチャレンジウィーク挑みました。小学生がどういうことをやったか。小学生たちが、京都にはどんなわらべ歌があるかを学外に出て、わらべ歌に詳しい人たちにお話を聴きにいった、その人に教えてもらって、わらべ歌で

遊ぶことを体験しにいきました。フィールドワークで実際に体験しているところ。各グループに分かれていろんなところに行きましたが、それぞれの場所によってわらべ歌も違うので、学校に帰って「うちのグループではこんなわらべ歌があったよ。うちはこんなわらべ歌があったよ」と集まって共有しているところ。皆で共有し、楽しいなど。チャレンジウィークの最後に校舎全体を「わらべ歌ワールド」にしよう。これを発表の形式としました。真ん中が学校の地図です。いろんなところで子どもたちが京都のわらべ歌を取材してきて、いろんな場所に1～8年生の子どもたちがきて、4年生たちが、上級生、下級生たちにこうやって遊ぶんだよと教えながら交流する場所を校舎のいろんなところにつくって、いろんな人と交流する発表の形式にしました。

これは体育館で縄跳びをしているところ。皆に教えて楽しそうに跳んでいます。オープンスペースで廊下のようなところでおじゃみ、お手玉を使って遊んでいます。音楽室。壁に紙を張って絵描き歌。歌を歌いながら描いていたらタコが出来あがった。思いのままにやっています。ホームルームで上級生、下級生と混じって「花いちもんめ」をやったり。時間は30品の発表でしたが、いろんな場所で、同志社小学校の中でわらべ歌がいっぱいに溢れて、1～6年生まで楽しむという活動をしました。それが、小学生が行った活動です。

チャレンジウィークでの活動で大学生がどういうことをしてきたか。同志社小学校の企画が昨年10ですが、私たちのプロジェクトは4月から、それに至るまでいろんなことかありました。コンセプト、私たちは何をやりたいのか。そもそも、わらべ歌って何やろ、と話しあいながら、自分たちでわらべ歌はこういうものだと決めて、みやこキッズという合唱団に企画を持ち込みました。その後、同志社小学校の企画のために準備をしました。4月、わらべ歌とは何か。わらべ歌を知っている人の話を聞こうと、ゲストスピーカーでわらべ歌に詳しい3名の方に来ていただきました。3人の方は奈良序大学附属小学校の音楽の先生である広津先生、わらべ歌の研究者の高橋先生、言語学者の堀井先生からお話を伺いました。教育という観点から広津先生から、わらべ歌とはどういうものか。高橋先生から、わらべ歌にはこういう音階があると音楽の観点から。堀井先生は京言葉、民俗学の視点から京都のわらべ歌について。自分たちの中に知識を蓄えていきました。

教えていただいたことをもとにコンセプトを考えました。キーワードは2点、つながりと気づき。京都の文化、京都の生活に対して、京都独特の生活に気づくことがあればいいなど。つながりというのは、わらべ歌の特徴を生かして仲間とのつながりを深くしていくこと。おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に遊んだり、下級生、上級生とつながっていく。わらべ歌を一緒にやっていく中で、京都のわらべ歌には歌詞の中に京都の生活に根づいた文化があります。ふとした時、この歌は京都のこういうところを表しているという気づきがあれば、京都の文化に対しての小学生の気づきがあればいいなと思ひまして、この2つをコンセプトで活動していきました。

わらべ歌とは何か。この楽しそうな子どもたち。わらべ歌とは子どもたちの遊びの中から生まれたもので、子どもたちが自主的に歌い遊ぶものだと定義づけました。私たちのやりたいこと、これからのビジョンを考えました。京都にあるわらべ歌を集める。こんな面白いものがあると。それを小学生に伝えて、うまいこと楽しんでくれれば、気づきにつながるのではないかというビジョンで活動していきました。4～6月と。7月、みやこキッズハーモニーと松江少年少女合唱団の二つの合唱団の交流会に呼ばれて、わらべ歌で交流しよう。その時の様子の動画です。この子どもたちは初めて会います。初めて出会った子どもたちが楽しそうに遊んでいました。わらべ歌を使っている人とならつながりをつくっていくとコンセプトを立てたことに確信を持ってた出来事でした。その時に僕たちが思ったのは、初めて出会った子どもたちがあんなに仲良くしている、歌う時に手と手をつなぐ、声を出すんですが、手と手が重なると気持ち

ちも重なるような気がしました。30分、1時間の時間ですが、皆か仲良くなっていたように思いました。

その後、夏休みを挟み、9月、ついに同志社小学校の企画に向けて準備していきます。計画を立て、京言葉の会への依頼。わらべ歌を子どもたちに伝える人々を語り部として探そうと。京都に住まれている京都の文化に詳しい方々にお話を伺うことで、子どもたちが信じるものがあるのではないかと。京言葉の会の方々に「小学生に教えていただけませんか」と話を持ち込みました。快くOKしてくださいまして、同志社小学校とも話し合いを重ねて、企画の実現に持ち込みました。計画を立てた後、大学生はどういうことをチャレンジウィークとするかを説明するために、小学生はわらべ歌がわからないので、大学生から小学生に授業をしました。竹澤君がやっています。机に座って、いい子で聴いてくれていました。わらべ歌の知識をつけた後、「京都にこんなわらべ歌があるんだよ」とフィールドワークに出かけました。フィールドワークは各グループ6名、グループによって、行く場所が違ふ。公共交通機関を使って、自分たちで考えて皆さんがいらっしゃる所に行つたわけですから、切符を買つて。京言葉の会の方がおられて、わらべ歌について学び、交流する際、ワークシートを用意して、子どもたちが紙媒体に書いて、わらべ歌がこんなものがあると、覚えやすいように用意しました。帰つてきた後、いい感じかなと思つていたら、小学校の先生に怒られたんです。「君たちがやっていることは面白くない、子どもたちのためになつていない。もう一度考えてみなさい。子どもたちの目線に立つて考えてみなさい」と。もう一度考え直してみました。わらべ歌って何だったのかを考え直しまして、自分たちのやつてきたことを見直します。フィールドワークでワークシートがあると、子どもたちは真面目ですから、しゃべりはつたことを書きちやうんですね。話を聴く、コミュニケーションすることより、書くことに集中してしまう。ワークシートがないと、その分、楽しもうとする。そう思ひ起こすと、お利口さんに聴いてくれていると、一緒に遊んで、ふれあつてコミュニケーションするのは、どつちがいいのか。京都の心をつなげるためには、もう一度考え直しました。

そこでわらべ歌とは何かを考えて、初心に戻つて、ドタバタだったんですが、方向性を変えましてワークシートをなくして、人と人とがつながること。わらべ歌は基本に、人と人とがふれあつて、面白いから、つながつていくと考へていました。ワークシートを用意することで、それを邪魔してはいたのではないかと考へまして、皆が手と手をふれあわせて一緒に楽しめるように工夫をしました。わらべ歌遊びにも一緒にお手玉をつくつて大学生と小学生がコミュニケーションをとれる場所をつくりました。チャレンジウィークの最終日、校舎全体をわらべ歌ワールドにしよつと臨みました。楽しそうに夢中になつて遊んでいる様子がわかると考へます。皆、学年が違ふ。その後で子どもたちは日記で、こつうことを言つています。「わらべ歌を僕の子どもにも伝えたいです」。

保護者の方からいただいたこと。「年長者がうまう声かけをしたり、譲り合つたりして子どもたちの確かな成長を感じました」。僕たちがやっていることは数字とか、グラフで表せるものではないんですが、こつう実際にやられていた生徒さん、保護者の方からの意見をいつてくださると、私たちのやつたことも間違いではなかつたのかなと思ひました。僕たちが活動をする中で何が大事か。お互いにコミュニケーションをとること、その中にいろいろ作爲的なものを入れるのではなく、できるだけ自然な環境にすることで京都の文化が自然と伝わつていくのではないかと考へました。以上、僕たちが行つた活動です。

活動してきて小学校と大学が一緒にやることによつて、何がよかつた。こつうところが難しかったか。一緒に連携すると自分一人ではできないことができる。他には代えられない大きな経験だつたと思ひます。これからも「連携」とこつうことを軸にした授業が行われることに賛成しま

す。メリットがあるんですね。大学生にできないことが、皆さんの力を借りることによって、できる。小学校も同じように何か新しいことができる。それぞれにメリットがある。私たちにとってのメリットは私たちが持っていった企画を小学生たちが、つまんなさそうにしていたのを、方向転換することによって考え方を改められて、本来ある方向に行けたと思っています。その意味で私たちは、いいプロジェクトとしていい影響を受けたのではないかと思います。小学校のメリットとして同志社小学校は地域のつながり、私立の学校なので学校の周りの人たちとワーワー遊んだりするのが難しいのですが、京都という一括りの人々とフィールドワークで、つながりを持つことができたのは、いいことではなかったか。そのつながりがチャレンジウィークの発表につながった。1～6年生が一緒に楽しい時を過ごせたのではないかと思います。

僕たちと小学生だけがいいのではなく、京都という、まちにもメリットがあるのではないか。京都の文化、わらべ歌を知ることによって、若者が京都の文化へ理解を示すことで、市長が、先程、ものづくりと物語づくりと言われましたが、物語の部分、文化に理解が深まって、若者が中心になってより京都らしいまちをつくっていけないのではないか。「三方よし」という近江商人の言葉ですが、「売り手よし、買い手よし、世間よし」という意味合いですが、それぞれに利益があって、自分にできないことを連携で可能にする力があるのではないかと思います。連携は、どんどん発展して行って、もっと精度を高めていけたらいいなと思っています。

同志社大学生としてどういうことができるかを考えましたプロジェクトのメンバーとして社会人としてのマナー。学生ならではのクリエイティブな視点を持って社会と接する。個儼不羈の精神、クリエイティブな考え方で、自分たちの決めたコンセプト、こうしたいという思いを変えない、譲らない。相手のことを、何でもOKと聴いてしまうと「三方よし」ではなく、相手のいいなりになっていることですから、自分を貫くという精神をもってプロジェクトに臨むことが、同志社大学生としてできることではないかと考えました。ご静聴ありがとうございました。

司会 3つの事例報告が終了しました。同志社大学では2009年度プロジェクト科目として京田辺校地、今出川校地、両校地で通年半期にわたりまして、24の科目が行われました。会場後方のパネルに24の科目の皆さんからの成果報告書を展示しています。この機会にぜひごらんいただけたらと思います。また、第2部、学生によるパネルディスカッション「京都の文化を考える」の演題にあわせて4つのテーマについて展示コーナーを設けています。会場奥から、2009年度プロジェクト科目『私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう』のテーマ。担当は経済学部4年次生、池田優佑さんです。その隣は『「花のキャンパスライフ」から情報発信に挑戦、新聞、ラジオ、ネットで』の展示は安藤美穂さん。資料コーナーをはさみましてこちら側には『京都の伝統織物の情報発信プロジェクト』担当は文学部4年次生、堀内ゆうきさん、一番手前は『「クラシックコンサート文化を創る」プロジェクト』の奥野世理奈さんが担当しています。休憩の合間に発表コーナーにお立ちよりいただければと思います。

■第3部 学生によるパネルディスカッション「京都の文化を考える」

わらべ歌遊びを通して子ども達に京のこころつなげるプロジェクト

同志社大学文学部4年次生 竹澤 啓二

同志社大学法学部4年次生 星野 康平

目指せ国民文化祭！誕生させよう京都学生文化コンシェルジュ！

同志社大学政策学部4年次生 渡名喜 美和

私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう

同志社大学経済学部4年次生 池田 優祐

「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト

同志社大学文学部4年次生 奥野 世理奈

司会 第3部を始めさせていただきます。学生によるパネルディスカッション「京都の文化を考える」。ここからは、文学部4年次生、竹澤啓二さんに司会をお願いします。

竹澤 今日はこの5人で学生パネルディスカッションを行いたいと思います。山田先生から学生が研究室にコンコンと叩いて入ってきたと。その叩いた学生が私でした。聖書の一節に門を叩きなさい、そうすると開かれると。まさに叩いたら開かれた。開いたその先は、でかかったという。プロジェクト科目、たくさんテーマがあります。その中で京都の文化を扱ったプロジェクトがたくさんある。プロジェクト科目というものは社会をよりよくしていこうというところにつながっているのではないかと考えていまして、そうすればそれぞれのプロジェクトは敵対するものではなく、手を取り合って、どこかにつながっていけるのではないかと考えました。その結果が、これなんです。



今回は京都の文化を扱うプロジェクトから何名か来ていただきました。私は「わらべ歌のプロジェクト」のリーダーでした。自己紹介から。

星野 「わらべ歌プロジェクト」に参加しました。星野康平です。

渡名喜 同志社大学政策学部4年生の渡名喜美和です。プロジェクト科目として「目指せ国民文化祭！誕生させよう京都学生文化コンシェルジュ！」として成果を会場の方で発表しております。

池田 経済学部経済学科4年次生です。正装ということで、自分も正装してきましたが、ちょっと反応が薄くて。本来、ここで、京都市長のお揃いでと、いおうとしましたが、着物を着てまいりました「着物プロジェクト」の池田です。

奥野 文学部文化史学科4年次生の奥野です。プロジェクト科目ではクラシックコンサート文化を京都につくる。昨年春学期は「みなと神戸訪日外客数アッププロジェクト」というのを参加して、そこで京都と神戸の観光文化の違いはどこにあるかということから京都の文化を考える機会をいただきました。今日のパネルディスカッションでは経験した思いなども踏まえてお話できたらと思います。

竹澤 このディスカッションは京都の文化を扱うプロジェクト科目が実際に京都の文化にどのような貢献をできるか。どのような活動ができるかを最終的に提案できたらということで話を進めていきたいと思いますが、最初に皆さんの大きな紙に、あることを書いてもらいたいと思います。それは「京都の文化のとらえ方」、1年間の活動をとおして京都の文化をどのようにとらえているか。「京都の文化はどんなものか」を、ボードに大きく書いてみてください。よろしくお願ひします。わらべ歌、出遅れています。残り10秒です。ではクラシックプロジェクトから提示してどうということかを説明していただけますか。



奥野（「積み重ね 調和」と書いたクリップを提示）私たちのプロジェクトをとおして思った文化は積み重ね、調和だと思いました。文化は一長一短に築かれるものではなく長い時間をかけて人々の間に受け入れられ、自然なものとして存在するものだと思います。もう一つは京都特有でもあるかと思いますが調和、古い文化に加えて新しい文化も馴染むような土地は京都にはあるのではないかと考えて、この二つを上げました。

池田（「積み重ねていくもの」と書いたクリップを提示）着物で書きにくかったんですけど、同じく、積み重ねていくもの。着物というのは過去からずっと積み重ねて着てきて今に至るわけですが、今までの着物の固定観念を覆してみようということを考えて実行に移してきました。京都市長も過去と相手は変えられない、自分と未来は変えられる。文化を過去と定義すると変えられないものになる。過去と未来は積み重なって、つないでいくことと考えると、未来を変えることによって相手に伝えることもできるし、自分も変わっていくことができるのではないかと思います。

竹澤 国民文化祭プロジェクトから。

渡名喜（「積み重ねていくもの」と書いたクリップを提示）国民文化祭の定義として、文化とは一方通行にはいけないものだと思います。プロジェクト科目を通して、いろいろ文化を継承したり、発展させたいと団体で頑張っている方々は数多くあります。団体だけで頑張っているけど、どうしようもない。その中だけではなく他の団体と連携することによって受信、発信していくことによって大きな効果的な力になるのではないかと。そのために文化はその団体だけではなく、コミュニティの中だけで熟成させるものではなく、完成させるものではなく、皆との受信、発信のやりとりで文化を発展させていくものではないかと感じました。

竹澤 わらべ歌プロジェクトから。

星野 「自然に伝わっていく」と書いたクリップを提示)自然に伝わっていくものである。わらべ歌プロジェクトで行っていく中で、大学生側の小学生に、こういうことを学んでほしいという思いが強すぎると押しつけてしまう形になって、子どもたち自身が楽しめないことを経験しましたので、できるだけ子どもたちが自分から進んで自発的に楽しめば自然と伝わっていくものだと思います。そういうものが選ばれていく。人々に選ばれていったものが文化ではないかと思いません。

竹澤 他のプロジェクトの考え方を見て「それはこうじゃないの、自分たちのところではこうだった」という考えはないですかあ

池田 わらべ歌プロジェクトさん。文化は自然に伝わっていくものだと。自然に伝わってくれなくて困っていますが、どうしたらいいですか？

竹澤 自然につながっていかないというのは？

池田 自然に任せたのが、どういう状態かわかりませんが、結果として今、着物離れが進んでしまって。成人式から着てないんじゃないかという状況で、プロジェクトメンバーもそんな人間で、着物を着られるようにすることから始めたんですが。

星野 僕も、着れないです。

池田 自然のままにしておく伝わらないです。着物を派手にコーディネートしたり、着付け体験教室をして着ようとしていますけど。わらべ歌さんは、どうやったら自然に伝わりました？

星野 扱うもの、題材が、わらべ歌ということで、子どもたちが好きなんです。パッとやって、キャアキャアやって遊びやすいので、題材がよかったので自然と4年生が他の学年の人たちに伝えてくれた。着物のプロジェクトに対して思うことは、着物の文化は京都で古くからあるものだと。織物のプロジェクトのシンポジウムで展示コーナーがありますけど、職人さんの話を聞いた時、つくっている工程が、手がこんでいて、職員さんの思いがきけたんですね。それを聞いて面白いなと思って、見た目ではなくつくる工程、つくる人の思いがあって、着物の価値はそこにあって、だから着物は高いのかなと。着物を見ただけで変えるより、着物が根本からこういうところから生まれて、こういうところがいいから今でも残っていると伝えていってあげたらいいのかなと思いました。

池田 なるほど、プロジェクトの活動が、若干違うよということだ。そうか。

星野 全然、否定はしていませんが。

池田 織物のシンポジウムにも言いましたが、着物の境遇は似ているはずで、どちらも斜陽産業なんです。洋服におされて。クラシックも、Jポップに押されていると思いますが、どうですか？



奥野 周りの友だちでクラシックコンサートに行くと、お金も高いし、ピアノ交響曲何長調何番とか、わけがわからないという反応があります。友だちがいいと思ってくれない人がいる。その人たちが、どうすればいいものなんだとってくれるか。そのきっかけを知りたくて、このプロジェクトに入ったところがあります。バトルを聞いていて思ったのは、思いが伝わると面白いというのがわかるということかなと。クラシック音楽を表面的には、Jポップを聴きなれている人には馴染みにくい。曲にこめられた過去の作曲家の意図、思いがわかったら、深みがわかった時、面白いなと思えるので、クラシック音楽の思いの広さ、深さを、その思いをわかる機会がないために、とっつきにくいと思うので、思いを知ってもらう場は必要なんだなと思いました。

竹澤 クラシックのよさ、思いを知る、文化を評価する観点として国民文化祭はアセスメントをついているとか。

渡名喜 文化を自然で受け継ぐものと。自分たちで気づいて初めて文化を知って、その文化をどうしようという積極的な態度が文化継承につながると思っています。クラシックのよさを深く知る機会が必要だと。わらべ歌でも子どもたちが自然に楽しめるように、わらべ歌の知識を楽しく伝える。知る機会、学ぶ機会を持たないと認識する場がないと思う。そういうことを設ける機会はプロジェクト科目が果たしていける役割なのかなとったりします。アセスメントをやった際に文化資源に数値が出ます。亀岡地域の文化資源はどれほどかという数値化することで住民の皆さんに見せたりしますが、客観的に気づかせる機会を持つことによって住民の方がこんな文化資源があったんだと気づく機会を担ってきたんだと、自負しています。それは大きかったと思います。

竹澤 亀岡市の文化資源を。

渡名喜 亀岡市の事例を用いて、どれほど隠れた資源があるか。資源がうまく活用されているか、市役所と文化振興団体、山鉾連合会の協力をいただいてアンケートをとりました。それを分析してこの資源はどれほどあるか、でも活用はこれくらいしかされていない。この考え活用をしたらいい効果になるという方向性を導いていけたら、というのが目標でした。

竹澤 文化のとらえ方の共通するところで感じられたものは。僕は一つは、人ではないか思います。文化というものは自然環境にも影響されると思いますが、重要なのはコミュニティがある、そこから生まれてくるものではないかと思いますが。

星野 コミュニティというのは人の集まりですか？

竹澤 地域に限らず、クラシックコンサートを聴きにくる一つのコミュニティとかです。

星野 コミュニティ、人の集まりと文化が密接に結びついているのではないかと。

竹澤 それも、文化を形成する一つの要素として考えられます。

渡名喜 団体の地域の方とのつながりができたからではないかと、どの科目についても、そう思います。

竹澤 文化とは何かは、一つにはまとめられないと思うんです。文化というものをつくっていくのは人であって、一人では、これは文化だといっても意味がない。たくさんの人がそれを支えているのではないかなと。

池田 文化を伝えていくのが人ではないか。人が文化を伝えていくので。人ありきだと感じました。

竹澤 そういう人、コミュニティが重要なキーワードになるとすれば、プロジェクトとして、そこにどうアプローチできるか。現在、活動中の国民文化祭のプロジェクトは。

渡名喜 科目は報告会も兼ねて終わっておられると思いますが、私たちは進行中で、アセスメントとか。プロジェクトをして思ったのは、地域コミュニティの方々、人々があつてこそ、文化がある。人々がいろんな団体が文化の継承をしていることはわかりますが、それを一つにまとめることによって大きな効果が出るのではないかと思います。一方通行にしないと提言したんですが。一つひとつ個体のものを融合させる力は学生の立場、黒衣役としての学生の立場をうまく利用してプロジェクト科目として何かできるのではないかと考えています。地域社会と私たちか学生で、社会の中にコミュニティはたくさんあるけど、それから一歩引いて客観的に見る立場として学生の立場を活用して、個体として頑張っている団体にアプローチして、仲介役として融合するための。個々に頑張っている団体をスムーズに橋渡ししていく。ここをこうしたら、こうなるという大きな枠組みをつくっていく。ムードメーカーではないですが、学生なりの役割が果たせるのではないかと思います。

星野 プロジェクト科目の人たちに何ができるかを考えると、文化の継承で、わらべ歌が高齢者の方が知っていて、僕たち以下の世代は知らない現状がある。埋もれていきそうな文化を高齢者の方から若い人たちに小学生に飛ばそうとすると、環境も違う、理解しにくいものがあるので、真ん中にクッションをおく。考え方も理解できるので、どういうところがいいのかを適切に子どもに伝えることができるのかなと。間に入って子どもたちに、かみくだせる状態で、橋渡しができるのではないかと思いますね。

池田 結論は変わっていないですね。うちのプロジェクトでも着物の架け橋になろうと目標に掲げまして、架け橋はあるところと、あるところをつなぐ。プロジェクト科目で、できることだと思います。展示を見ていただくと着物と現代的なものをつなぐ活動をしています。着物ドレス、着物ワンピース、ブーツをはいて着物にコーディネートする。過去と未来、伝統と現代の架け橋と頑張ってみました。

奥野 架け橋に共感しました。クラシックプロジェクトも架け橋になることをしていたなど。秋にコンサートした時に未就学児対象のコンサートを企画しました。「未就学児はご遠慮ください」と書いてあって、未就学児はこれからどんどん感受性が伸びていくので、その子どもたちにクラシックのよさを知ってもらおうと、今後、取り入れていくはずだという思いからコンサートを企画しました。保護者が「日頃、子どもが騒ぐと気をつかっていた。クラシックに入る機会がなかったけど、このコンサートのおかげで子どもたちが触れるきっかけになった」と。その時にクラシックと子どもたちをつなげたと思ったので、わらべ歌たちの活動も学生の立場で社会のコミュニティの人々と文化とつないだ、リンクさせたのかなと思いました。

竹澤 キーワードとして「つなげる」ということが出てきたと思いますが、プロジェクト科目は1年間の活動で予算として60万円。メンバーが10名程度という制約もあり、大きなことはできない。地域に入って行って団体、人々をつないでいくことができるのではないかという点で意見が一致しているのではないかと思います。最後につなげるためには具体的に、どういうことをしていけばいいか。「プロジェクト科目として人々をつないでいくことに具体的なこと」を書いてもらえますでしょうか。1分間で。今回、このメンバーに声をかけさせていただき、皆さん、4回生で忙しく、着物の池田君は朝、福岡から帰ってきたり、就活の中で頑張ってくれて、うれしく思います。わらべ歌は出遅れていますね。

星野 そういう竹澤君も、昨日、北海道から帰ってきたらしいです。

奥野 そういう状況でもパネルディスカッションに参加したのはプロジェクト科目に思いがあったという解釈でいいのかなと。

竹澤 では、クラシックからどうぞ。

奥野（「想い・目的・認識の共有」と書いたクリップを提示）架け橋、つなぐ上で大事だと思ったのは、想いや目的、認識を共有すること。何かと何かをつなぎたいと相手にアプローチしても、西原君が生徒の方は意図をわかっていないという話が出て、自分たちが、こうしようと相手に働きかけても、意図がずれていたり、伝わらない時には合致した、満足した結果が得られない。どういう想いでつなげたいのか、相手に、どうしたら自分たちの意図が伝わるか、わかってもらえるか、理解してもらえるかを意識しながらコンセプトを決めたり、目標を決めることが必要かなと思います。

池田（「サーバントリーダーシップ」と書いたクリップを提示）サーバントリーダーシップという言葉がありまして、資生堂の福原社長が提唱しています。下からのリーダーシップという意味で使われています。プロジェクト科目は学生が一からスタートするものなので、知識もあり、リーダーシップ、基礎的な能力があってバリバリできる人の団体をとりこんで、でかいことをやるみたいなことは難しいんですね。着物レンタル屋さん、ドレスショップとかに下から「ちょっと大変なので手伝ってくれませんか。何もわからないので教えてくださいませんか」と下から願い出ていくことによって「よしよし助けてやろうか。しゃあない」と自分たちを助ける名目で皆さんが力をあわせてくれたらいいなと。そういうプロジェクトであると、地域の中の面倒みよさの集まりができて、大きな力になるのではないのでしょうか。

竹澤 国民文化祭の科目、どうぞ。

渡名喜 「イメージの共有・柔軟性」と書いたクリップを提示)イメージの共有と柔軟性です。実際リンクしています。目的、目標の共有をすることが計画していく上で必要です。カチカチの計画をつくっていくと何か予想外のハプニングが起きた時に余裕がなくて。実体験もあったので、イメージの共有をしっかりしつつ、柔軟にゆとりをもって相手の立場を考えることが計画を進行する上では重要なこと。それが社会とつながっていく。プロジェクトでは2点、柔軟性とイメージの共有が課題かなと思いました。

星野 「ゆずれないものはゆずるな！！」と書いたクリップを提示)譲れないものは譲るな。イメージの共有、柔軟性も大事だと思いましたが、その中で社会の方々とお話する中で、自分の信じるものを持って人と話を進めていかないと皆が満足することはできない。言われたとおり、はい、はいとやっている、いいものがない。互いに譲れないところをしっかりとって、これは絶対譲れないということをお互いにぶちあたっていけば、よりいい文化が京都に根づいていくのではないかと。

竹澤 それぞれ皆さん、書いていただいたものを上げていただいて、これだけ出て、まとめる気持ちはありませんが。これだけの意見を出す。座学の講義では1コマで終わる内容かもしれないですが、これを1年間、2、3年と長い期間をかけて自分で答えを見つけていったことが一番大きいのではないかなと思います。

星野 ありきたりのようなことですが、本当にそうです。

竹澤 でも、このことを座学で聞いたら、半年後には忘れています。これを1年かけて気づいた。そういう意味では一生忘れないのではないかなと思います。今回、こういう形で、皆さんの前で発表できたことはよかったかなと思います。質疑応答も、レセプションでしていただけたと思います。皆さん、今日はありがとうございました。お聴きくださってありがとうございました。

司会 ありがとうございました。

■第3部

東京電機大学プロジェクト科目の取組と今後の展開

東京電機大学 情報環境学部 教授 中村 尚五

司会 シンポジウム「教育」の壁を越えてに移りたいと思います。

本日のご登壇者であります東京電機大学情報環境学部中村尚五先生より「東京電機大学プロジェクト科目の取組と今後の展開」についてご紹介いただきます。

中村 タイトルが重くて、あまり気が進まないんですが、山田先生が問題提起をすればいいとおっしゃったので引き受けさせていただきました。「未来を切り拓くPBL～教育の「壁」を越えて」ということが気になるんですが。まずバックグラウンドからお話をさせていただきます。今、大学の学部教育はかなり大変なところに来ております。高等学校も中学校も同じことなのかもしれません。例外は当然あるんですが、平均的な感じから私の印象なんですが、入学してくる学生は学力とか多様化しております。特に私どものようなところでは一般入試、センター入試、AO入試、指定校推薦とか、さまざまな経路で入学してくる学生が、それぞれの能力、資質を持っています。一様な学力ではない。20年前ですと一発勝負で入試だけで適当に線引きをして学生を受け入れましたから、能力は別として、学力的にはある程度均一な学生を受け入れることができたので、教員としては教育上、自分たちの知識、自分たちが教えたことを、ただただ教えればいいという感じで教育をしてきて、それで何とかなってきました。もしかすると本質的には何ともなっていないのかもしれませんが。戦後の苦しいところから立ち上がって経済力は世界一のレベル近くまで来たというのは、そういう教育を受けた人が社会的な活躍をした結果だろうと思っていますから、その点では一種、成功だったのではないかと思います。

しかし最近ですと、多様化の問題がありまして、一つの入学試験だけで受け入れるわけではありませぬので、こんなきれいな山にならなくて、高さも不揃いになる。そういう学生を受け入れ、大学教員は個々の学生たちに合った教育を実施しなければいけないんですね。ところが我々大学教員は教育のプロではない。研究はある程度やりますが、どうも教育のプロではない。私の場合は。周りは、研究は結構やっていますが、教育の面からは「？」というところが、ある場合が見受けられます。そういう時、今の教育体制でいいのかどうか、さらに困難な問題があります。多様化の問題は、学力だけの問題ではなく、最近では精神的な要素で深刻なものとか、思いが非常に特化している人とか、いろんなケースがあります。大学教員だけが黒板に向かって何かを教えればそれですべてうまくいくかという、到底、それは考えにくい状況になっております。教員が得意な分野は専門分野で、10年、20年前と同じように教育すれば学生は勉強すればついてくると。ついてこられないなら学生が悪い。一生懸命勉強しないからだめなんだと思ってしまう先生も、結構おります。ただそれでは問題解決になら



ないところまで、何年か前に、そういう状態になっているのが現状だろうと思います。

5、6年前から経済産業省とかから社会人基礎力、大学卒業生の社会人基礎力が問題だという話が頻繁に出てくるようになりました。学力に関するものも、いろいろ言われますが、最近の就職関係の新聞記事等では、企業が学生に求める能力の上位に「行動力」「問題解決力」「コミュニケーション能力」があって下の方に「専門性」が入ってくる。だから勉強しなくていいということではなく、暗黙のうちに大学人として、学部の卒業生として必要最低限の基礎的な専門性は身につけた上で、いろいろな問題が社会から要求されています。特に社会人基礎力という決断力、判断力、問題発見する力、コミュニケーション能力、これは普通の座学の中では、どうしても教えることができないような範疇に入っております。それはどうやればいいのか。それと同時に最近、かなり解決されつつありますが、日本の大学カリキュラムの問題点として、昔からいわれていましたが、最終的には今いう社会人基礎力はほとんど卒論の中でやればよいとなっていました。4年生ですべてやっていることになっているわけです。コミュニケーション能力も、すべて卒論の中で身につけて卒業するから問題がないということになっていたんですが、どうもそれではすまない状況になってきています。

そんなところだけがバックグラウンドではないんですが、PBL教育が、かなり前から、私どもの学部でも平成2年に開設して準備して平成3年からスタートしています。ご紹介するのは理系ですので一般性がない。理系のプロジェクト科目としてやったこととお話させていただきますので少し馴染まない部分かもしれませんが、この狙いは卒論にすべて押しつけていたコミュニケーション能力、課題発見能力、チームを組んで与えられた課題を自分たち力で解決していく能力をトレーニングするような科目の一形式になっています。学生が主体でやりますので教員はアドバイザーの形をとります。評価は教員がしないといけないので、評価の部分は問題もありますが、多分、今のPBL教育で実際にやっていくと問題になるのは、チームをくんでやった時、数人ですとやりやすいかもしれませんが、10人、15人になった時、評価をどうするかという問題があります。学生たちに納得できるような評価体制が、うまくつくれるかどうか結構、難しい問題です。そういうことも含めておりますが、PBL教育は少なくとも自主的に課題をチームを組んで解決していくような要素を含んでいますので、普通の座学の中では教育できない種類のトレーニングができる可能性は十分持っていると思います。現在の平均的な大学教育の壁を越えて、いい方向に持っていく特効薬にはならないと思います。これはごく一部の補完にはなるが、全体的な特効薬にはなりえない。高校生の西原君が「万能な方法はない」と。まさにそうだと思いましたが、そういうことだと思います。教育に「これさえあれば絶対大丈夫」という手法はないと思います。なぜかという学生がどんどん変わっていきますから、それに対応したシステムをつくらない限り、なかなか「これさえあれば」というものはいくらもつくれない。絶えず流動的に動いているので、難しい問題をはらんでいるのだろうと思います。

私どもがやっているプロジェクト科目は理系ですので、企業からテーマを出してもらって学生の応募者が、必修科目ではないのですが、とる学生が多くなったんです。200名近く応募すると企業数が足りなくなりました。平成2年に応募した時は100社くらいでした。不便な場所に学部があって、電車賃も高い。それで企業が100社来て趣旨を説明させていただきました。企業だけだとすべての学生を納得するだけのテーマを出せない。教員側からもテーマを出す。プロジェクト科目の精神に則るテーマをお願いしています。企業からテーマを出すことを主体にしますので、企業には行かないが、学内で企業の要請したことをやる形から、一種のインターンシップである。普通は現場に行き行ってやることに意味がありますから、これはインハ

ウス型です。現場経験はできないんですが、企業でやっている問題に触れることはできる価値はあるかなと。今も進行してきています。

学生アンケートをとりますと、大体、いいという感じですが、「この授業は将来悪に立つと思いますか?」。多くの学生が「そう思う」と答えています。「1週間にこのために勉強していますか?」。平均5時間くらい。実はこれでも足りないですが、最近では座学を時間外で勉強する時間が日本の学生は少なくなっている。平均値から見ると、かなり高い。この科目については勉強しているという感じはあります。「総合的に見て高く評価できるか?」は、かなり高い評価が出ています。「この授業は知的好奇心を喚起し、興味関心のある内容であったか?」。これも高い。学生側から見ると、かなり人気のある科目であると同時に、かなり社会人基礎力的なトレーニングになり、学生たちは授業時間外で学習するような習慣を、少しずつ、これを通して身につけさせる可能性が見えてきていることを感じます。

これは決して結論ではないですが、プロジェクト科目によって、どのような技術者を育成しようとしているか。社会人基礎力の醸成は、ある程度できるだろうと思います。実際に社会から請け負った問題を解決しようとする基礎的な学力が必要となる場合がある。専門性が高い内容が必要となることもあり、自主ゼミを開いて解決するんですが、簡単なことで基礎的なことを必要とされることがあります。基礎学力の重要性に対する認識は、そこから身につくかもしれません。今まで授業で習ったことがないような、外部からの問題が出てきますから知的好奇心の高揚には多少寄与できるのではないかというところまできたのが現状です。これからは起爆剤にして、もっといい方向に大学教育の問題点の補完の一部でもなればよいと考えているところが、現状だと、ご理解いただければと思います。

司会 ありがとうございます。それではシンポジウムに移ります。東京電機大学情報環境学部教授中村尚五先生。大阪桐蔭中学校・高等学校教育相談室長・堤晶子先生。京都市立朱雀第二小学校教諭・吉田綾美先生、プロジェクト科目履修生同志社大学商学部3年次生・谷井佳輔さん。司会は本学PBL推進支援センター長・山田和人教授です。よろしくお願いたします。

■シンポジウム 「教育」の壁を越えて

東京電機大学 情報環境学部 教授 中村 尚五
 大阪桐蔭中学校・高等学校 教育相談室長 堤 晶子
 京都市立朱雀第二小学校 教諭 吉田 綾美
 同志社大学 商学部 3年次生 谷井 佳輔
 (司会)同志社大学 PBL 推進支援センター長 文学部 教授 山田 和人

山田 今日のテーマは重いテーマですが、何らかの行動を起こそうとしますと、常にその前に自分たちが目指しているものと矛盾したり、うまく接合できないような問題点が出てくるものでございます。このプロジェクト型の学習が持っている特性が同時に諸刃の刃でもあり、逆にうまく相手に伝わっていかない場合もありうるわけです。教育効果の高さと同時に、うまく評価できるかという問題と常に表裏の関係になってしまっている、そのあたりを中村先生からも問題提起をなされたと思います。



ここから具体的な個別の事例の中で、それぞれの抱えている「壁」を、言いにくいところだと思いますが、まずお話をいただき、それから重なりあってくる部分を見つけていきたいと思えます。大阪桐蔭の堤先生から現在、抱えておられる問題について過激な問題邸的をお願いしたいと思えます。

堤 この度シンポジウムに参加させていただき、田端副学長、山田PBL推進支援センター長、金田副センター長をはじめとして教務課、事務局の方々を含めて皆様の、大変強い絆というか、信頼関係によって、PBL推進の活動そのものがPBLになっているんだなと感じました。皆様が、まさにPBL手法によって前向きな仕事をなさっていることに感動いたしました。それに、学生さんがとても優秀で、同志社大学の学生であることにに対してプライドを持ってPBL科目に取り組み、成長なさっておられることに対しても重ねて感動いたしました。また本日は、教員とともに生徒の二人に発表させていただく機会を持たせていただいたことを大変感謝しております。

今、山田先生がおっしゃっていただいた問題は、私たちが責任を持って育てないといけない生徒たち自身がまさに指摘していた点とも重なり、私たちの心臓は子どもたちの一突きで、まさに瀕死の状態なんですけど・・・

さておき、全体の取組としてできたというのは特殊な状況があります。大阪桐蔭という学校は、大阪産業大学附属高校大東校舎から独立校になり、その当時の初代校長が今でも校長をしております。すでに25年の月日が経っているということです。そのこともあり、校長からのトップダウンの形で学校は成り立っておりまして、生徒も先生からの指示どおり行動する、統制がとれた状況を是とする校風があります。その中で、自主的に考えたり活動したりすることのできない生徒がどうしても育ってしまっていて、それを何とかしないといけないという課題がありました。先

生達は一生懸命やっていますので、このままの枠組みの中でこれ以上頑張れとは言えない。それでも、そこでなんとか子どもたちに何かをさせないといけな。子どもたち自身が考えて、自主的に活動するものを設定しないと、私たちの学校はこれ以上の発展は望めないのではないかという思いから、我々も気づいていく。私は、PBLは「気づきの教育」だと思っていますが、その気づきの中で、ファースト・オーダーとセカンド・オーダーというか、メタステージから自分自身や状況を客観的に俯瞰するという見方や、自分自身をそれまでとは違った角度から見つめるとい瞬間がでてきます。そういう子どもたちを育てるということを目指に、やってみようということになったんです。

そのためのフレームは、統制がとれた校風のおかげもあり、トップダウンによって一応、設定することはできました。しかしながら、フレームだけではなく、その中身のブラッシュアップであったり、運営であったりといった面で、常に時間をかけて、心をかけてオペレーションしないといけない。そのことに対する教員間の理解の問題と、時間的な問題があります。私どもは中等教育の人間ですので、目の前のゴールである大学受験のハードルが高い。大学受験というハードルを目の前にした環境の中で、校長をはじめとする教員が、PBL教育に対する共通の認識を持ちにくい、それを進めていく余裕がないというところが、今のところ大きな「壁」となっていると思います。

山田 かなり、なまなましい発言で、生徒さんを目の前におきながら告白していただいているという、グサツときながら、お話を聴きました。私も思うんですが、初等中等教育で採り上げられる問題は学校経営の問題と直結していて、それが教育にそのまま反映されてくる。どういう形でやっていくかということがあり。一つだけ伺いたいのはプロジェクトワークという科目群をつくってしまうというのは、総合的学習の時間を使うことはあっても、いきなりプロジェクトワークというのは、なかなかできることではないと思いますが、どういう工夫をなさったのでしょうか？

堤 トップダウン型で成り立つ学校として、決まってしまったことは教職員全員が一緒にやるんだという風土が幸いしたと思います。発想としては、山田先生がなさっているようにプロジェクト科目という、教科の指導の中でちゃんと単位を認められる形で行っていくということです。本来的には、PBLをすべての教科指導の中に入れていくことが理想なんですが、それは現状の学校の中では大変難しい。クラブ活動はPBLに向いていますので、それができればやりやすいのかなとも思います。ただ、われわれ大阪桐蔭は、毎日50分7コマ、夏休みは2週間、高3はお正月の元旦から勉強しているようなとてもハードな学校で、それが難しい。ですから、総合の科目の中でしかできないという共通認識がありましたので、その時間を使うということになりました。当初は、何をしたいかわからない、どうするんだという不安を一身に受けましたが、「見切り発車だ」と言いました。わからないでもいい。わかってからしかやらないのであれば、一生できませんと、やってしまいました。やり始めると実は子どもたちが「こんなことをやりたい、あんなことをやりたい」とやってくれまして、現在、育てているプロジェクトワークの種目は子どもたちが実際に発案、実行してくれているという状況であります。

山田 ある種、腕力も必要だと。大阪桐蔭が目指しているところ、克服していけないところをどう埋めていくかという工夫が、プロジェクトワークの授業を生み出したのではないかと感じました。

吉田先生。実際に公立の小学校ではカリキュラムが決まっている、教科の壁があって、そこ

に大学生がやってきて、こういうことをやらせてくれないかと。そういうことが、どうして受け入れられたのでしょうか。ほんとうのところは如何でしょう。

吉田 過激な発言でいいということなので、門川市長もいらっしゃらなくて、前教育長です。子どもたちと担任との時間が長いで。大学生の方が来て、教えていただける、地域の方が学校に来て教えてもらえるとか、学校側でいろんな人を受け入れて、子どもたちに刺激を与えようとしているので、同志社の方のお話があった時、子どもたちにすごくいい刺激になる。若い力で子どもたちに刺激を与えてもらった方が子どもたちにとってもいい意味で、いろんなことが勉強になるのではないかとということが一つの受け入れられる理由になったと思います。もちろん演劇の中でコミュニケーションをやることは基盤ですが、一つの理由として一緒に大学生とやれることも大きな理由だったと思います。

山田 学校側でいろいろなものを受け入れて教育のきっかけにしていこうと、機会にしていこうという姿勢が、小学校の中に基本的にはあったと。そのことがうまくタイミング的にあったということでしょうか？

吉田 そうですね。テーマも環境ということで、受け入れやすい体制だったと思います。

山田 いずこも受け入れてくれやすい体制でしょうか。実体験をした谷井君も含めて。

谷井 メンバーが12人くらいで、一人1、2校を受け持って、企画書を送って電話してみようとするんですけど、門前払いですよ。考えてみたら、あたりまえだよという話をされていて、大人の方は忙しい。学校には学校のやり方がある。すべてが受け入れてくれるわけではないとわかっていまして、断られることをコミで、教育だろうと。話を聞いてくれる環境にすらないものは、辛いものがありましたね。

山田 よくできた解答ですね。それもまた教育の機会であると。トライをしていく力が学生の場合には確かにあって「これはできないのではないかと実は前の演劇の時に科目代表をやっていて「公立の場合には受け入れは難しいのではないかと」意思表示をしたんですが、ガーンと引っ繰り返されて、もの見事に、できちゃったことで、ショックを覆い隠すことができないということでしたが。そういうふうに入れてくださるところもある。学生さんのトライの精神だったのかなと思います。

会場の皆様からも、ご意見をお持ちの方、「壁」に共感してみたり、こういうふうに越えてみたりということで、ご関心をお持ちの方がいらっしゃいましたら。ご質問の機会を受け付けたいと思います。

会場 ××大学大学教育実践センターです。10年前、教育実習をやっていて、その時、総合的学習の時間が入ると。こんなもの、どうやってやるんだらうと議論した覚えがあります。大学で同じようなことをやることになるとは思っていなかったんですが。大学の先生はつかまえば何となるんですが、高校や小学校の先生はつかまえることは難しく。総合的学習を入れて問題になったのは教員が楽になるのかというと、楽にならない。真面目にやろうとすると子どもたちをサポートしないといけな。自分で気づきを促すためには。大学生以上に、児童は受け身で、それ

をどう促していくかが重要だと。労力がかかるのではないか。その部分を、どのようにされているか。もう一つは基礎的な知識、スキル、「じゃ、やっごらん」の前の基礎的なスキルがない。その部分をほっておいたら、できないわけで。そのように扱っているきっかけとか、ヒントをいただければと思います。

山田 最初の質問は、堤先生、いかがですか？

堤 労力がかかるというのは事実だと思います。私も、学校法人大阪産業大学の一機関でするので、大阪産業大学大学院アントレプレナー専攻の先生方がPBLを研究開発されていて、そういう先生方のご指導を受けております。そこではPBLの理念であるとか、目的、教育効果、まさに導入方法をご指導いただき、先生たちに対しては、労力がかかるが、教育者として、育っていく子どもの姿、劇的ビフォー・アフターを、3～6年間かけてPBL手法で築いていくこと、つまり、生徒たちが積極的に目標をとらえていって、育っていく姿を見るのが私たちの一番の喜びではないか、頑張ってみよう、と申し合わせながら、子どもたちの発表など、育っていく子どもたちを皆で見て、保護者の方にも喜んでいただくという、そういうことをエネルギーに代えていこうということでやっております。

吉田 小学校もなかなか大学生のようにテーマを聴いて「はい、これしなさい」とはできないので、かなり苦労しています。総合学習が入った時は地域に根ざした総合学習で、地域の産業、地域の伝統産業に教師が足を運んで店に「今度、小学生が来るので、ちょっと教えてやってください」とかなり最初のうちは一緒にやったださる企業、店に足を運んで頼みました。現在は、ある程度できていますので、テーマを決めて、5年生は環境、6年生は国際問題で外国の方を招いたり。4年生は障害をもった方とか。テーマも決めて、4年生くらいから段階を追ってやっています。かなり労力がいますし、テーマの中で何を学習していきたいか、何を勉強したいといっても、わからないので、手助けをしながら見つけさせていきます。読む力、書く力、基礎的な学力がないと、しんどい子どもたちがたくさんいます。そういう意味では日々の基礎能力に小学校は力を入れているという状況ですね。

山田 今おっしゃったとおりの問題だと思います。同時に、ある種、児童の場合の問題、生徒の問題もあります。どういう形で、児童、生徒、学生のモチベーションを維持しながら活動していくことができるかも大きな問題かなと。東京電機大学でもいろいろな試みをされていると思いますが、中村先生から。

中村 理系の立場からのお答えになると思いますが、残念ながら大学の場合でもテーマを提供して学生だけで、どんどんできるということは言えないです。アドバイザーが必要になります。一つのテーマに関しては一人のアドバイザーがつきます。教員の負担は結構、重いです。ほとんど全部の学生が履修しますから。具体的にはどうやっているか。企業等から与えられたテーマを解決する時、学生にとっては新しいことが多くて、基礎的なものは使えますが、新たに勉強しなければならないことも結構あります。必ず最初の1カ月くらいは自主ゼミ的なものをやります。それには教員はつきあいます。「解決案は、絶対教員は出してはいけない」ということを教授会で決議しました。絶対出してはいけないんです。たとえ学生が失敗しても、それは出さない。企業にも最初の約束で「社員ではないので、皆さんの企業に直接勤めないにしても、将来の日本の

技術者を育てる上で企業もコントリビュートしてほしい」とお願いしてテーマを出していただいています。失敗しても、その学生たちにとっては、いい経験のプロセスになるんです。失敗しても、それはそれで価値があると思います。しかし今まで大きな失敗をしたことは聞いたことはありません。

そうはいつでも結構重い科目で週2回、学生は集まって2時間くらいミーティングをやっていますが、そのうちの1回は、その週のまとめのような形で、アドバイザーの先生はつきあってコメントをします。負担は重いですね。理系だから、できているかもしれませんが、基礎フロとか、プロジェクト科目で扱うテーマが卒論につながるものがあるんです。Semester制で切ってはいるんですが、上に卒論の学生がいて、研究室に来ておりますので、先輩の卒論生がコメントをくれる。縦のつながりで、うまくいきます。そういう循環ができると、思ったより以上に、いい形で進展できる。我々のところは、そんなことです。

山田 答えを出さないというのを教授会で決定しなければならない。このへんが大学の現状でございましょうか。何人かの先生が深く頷いていただきまして、ありがとうございます。学生というのは教室内の学ぶだけではなく、実際には、そこから離れたところでの学びが大きいわけです。私たちにとっては学生たちが、どういう活動しているか、どれだけプロセスを評価できるかは、かなり大きな問題かと思えます。このことは小学校、中学、高校、大学で共通していると思います。総合的学習の時間が設定された時点で、それもまた見ていくようになりますと、これまた負担になるわけですが、初等教育、中等教育の方が、プロセス評価について、ひょっとしたら進んでいるのではないかという感覚を持っていますが、そんなことはないですか？ ないで一す、とおっしゃっていただいたらと思えますが。

堤 ほんとにございません。皆、頑張れば、内申点は5がつきますよね、ということになってしまっております。正直申し上げます。

山田 やさしい評価システム、吉田先生、いかがですか？

吉田 プロセス評価は難しく、最後まで頑張ったという、何か一つ、自分で作りあげたかということが最終的な評価になります。プロセスの間はやっている姿勢とか、子どもたちの姿勢をみて、頑張っているな、さぼっていたらお尻たたこうかという感じのプロセス評価です。書かせたりすると書ける子と、書けない子で評価が分かりますので。小学生の場合は最終的に、自分なりにできたらということで評価することが多いです。

山田 評価は難しいですよ、という話ですが、私の隣に学生の立場で座っていただいている評価される側からいってみれば「こういうプロセスを見てよ」という関心から一言。

谷井 答えになるかどうかわかりませんが、高校か中学の時、感動したことがあって、数学のテストで証明のテストで答えまで書かなくても、考え方が合っていたり、途中までちゃんと書いていたら、部分点をくれたりする。それで、なんてすばらしいことだろう。センター試験だと、AとBで迷っていたけど、こうだからBと書いたら、Aだから×だと。迷いをテストにぶつけたら、ちゃんと先生は見てくれて○にしてくれたりするんですね。数学とプロジェクト科目は違うかもしれないけど、間違っただけで失敗したこと、「この考え方はいいじゃないかポイント」はあってもいいんじゃないかと

思います。

山田 中村朱里さん、どうですか。西原さんからも厳しい一言をもらおうと思っていますが。

西原 自分も谷井さんと似ているんですが、考える過程、原因と結果があるけれども、その間にある発生過程をちゃんと見てほしいなど。原因と結果の間にある発生過程の中に生徒自身が考えて成長して自分の中での意見を上書きしていったり、そういう試行錯誤の過程が、そこに凝縮された結果が自分なりの解答があるので、結果としての解答もそうですが、発生過程にも、できれば目を向けてほしいと思います。

山田 出ましたよ。それでは中村さん、いきましょ。

中村朱 私が思うのは、生徒自身が楽しんで自分のやりたいことをできているか、田村先生はいつも私たちが調べていることや、それについてアクションを起こして楽しんでいると、常に見てくださっていて、協力して下さっているということです。楽しむか、楽しんでいないかという、あいまいですが、生徒が自分のやりたいことを楽しんでいたり、目を輝かせていたり、そういう姿を先生に見ていて頂けたらと思います。どうしたらいいのかわからないとか、自分で行動を起こせない生徒がいると、助け船を出していただき、評価というよりは、生徒一人ひとりが、何か目標を持ち、それを成し遂げた時の喜び、いわゆる達成感を味わわせる事が、大切なのではないかと私は思います。

山田 ありがとうございます。後輩が、そういうふうになっています。

谷井 そうだと思います。すばらしいです。

山田 大事なことをおっしゃっていただいて、自分自身の目標がまずあって、自分自身の目標に対して、どれくらい達成できたかを考えていく。そして目標をつくりだしていくこと自体が、その人にとって意味を持っているかまで見ることはできないと。もっとプロセスを見てほしいというか、そこをご指摘であったのではないかと思います。その点は我々も肝に命じて努力していかなければならないのではないかと思います。

楽しくなければいけない。私も、そう思っています。プロジェクトというのは楽しくなければ続かない。別の言い方をすると自分自身が、それに愛着を感じる対象であれば、そこに学生たちは自分自身のあるべき姿を重ねていくんだと思うんです。そういう愛着の対象に、その子はどうしてなったのか。ある時、ある瞬間、突然そう思うんですね。不思議なものです。それを、どこでどう把握できるのか、実は私は、それはできない話ではないと思っていまして、それが現在、次年度から導入していこうとするデジタルなポートフォリオです。自分の活動を1週間単位で振り返りながら、自分自身の成長過程を自分自身で見つけていく。その中に何が問題かを発見していける。しかしそれを自分自身の習慣の中に取り込んでいかないとはいけませんから、そのためには多少のしんどさも、中には伴うかもしれませんが、そのことを通して自分自身で発見する喜びを見つけていくことができればいいのではないかなと思っています。

従来は点数をつける、それがゴールになっている。ゴールの評価から、プロセスの評価へ、PBLの教育は、徐々に移行していかなければならない。そのためにどんな指標をつくりださない

といけないか。指標づくり、仕組みづくりが、PBL推進支援センターの役割でもあり、そして皆さん方からこういう機会を持つことで、課題とか問題点について共有化できて、認識を共有していく場として、こういう機会を、どんどん積極的につくっていき、皆さん方と一緒に、そういう問題について考えていきたいと思います。

「壁」を越えること自体は「壁」が見えなければ越えることはできないわけで、私たちにとって壁が何か、現場にとっての「壁」は何かという意識を持ちながら、その中の問題点を共有できれば、おそらく、きっと「壁」は私たちの前で低くなっていくのではないかと考えています。

ただ今日、先生方のお話を聞いておまして、どこか、やはり学生、生徒、児童の学びというのは彼らに対する信頼感のようなものにつながっているのかなと強く感じました。その点は私も同様でして、多分、学生の中にある潜在的な能力を、私たちはある瞬間、誰かが、学生同士の間で、そのスイッチを押す瞬間があり、あるいは地域に出かけていって、その方がスイッチを押すのかもしれませんが、学生の中には研究力、教育力、社会力、こんなものが潜在していると考えています。研究力は児童にも備わっています。知りたい。学びたい。教育力は人に教えたい、伝えたいという気持ちがある。社会力、人に対して社会の役に立ちたい。つながりたいという感覚が、学生のパネルディスカッションにも絡んでいます。学生の中に備わっている社会力があるのだろうと。そしてまた中村さん、西原さんの話を聴いていて、研究力、それ自分自身で伝えてクラブ活動の中でつながっていこうとする。そういう姿勢の中に教えあうという協調学習の可能性も見ることができたように思います。

これからPBL推進支援センターは、今後も、こういう研究活動を継続させていき、3年目にはお約束をした評価の手法を皆さん方に提示できるように努力していきたいと考えています。そして実際のプロジェクトの活動も、多くのPBLも、さらに進化していくことを念願しております。最後にコマーシャルですが、PBL推進協議会はそういう研究をともに進めていきたいと思って組織されたものですので、教育機関の「壁」を越えて、小学校、中学校、高校、大学、幼稚園、保育園をひっくるめて、関心のある方がいらっしゃいましたら、事務職にお申し出いただきましたら連絡をさしあげるようにしたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。本日はどうもありがとうございました。そして中村先生、堤先生、吉田先生、谷井君、ともに「壁」を越えていこうとする同志だなと思い、皆さん方の率直な、ナマの声を聴かせていただきまして、ありがとうございました。皆様方に拍手をお願いしたいと思います。挨拶をこみでお話をさせていただきました。本日はどうもありがとうございました。

司会 これをもちまして文部科学省大学教育・学生支援事業「テーマA」大学教育推進プログラムプロジェクト・リテラシーと新しい教養教育、課題探究能力を育成するPBL教育の方法論的整備」の取組として、シンポジウム「未来を切り拓くPBLー「教育」の壁を越えてー」を終了させていただきます。長時間にわたってご来聴いただき誠にありがとうございました。

▼ 同志社大学 PBL 推進支援センター

今出川キャンパス 〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入 弘風館1階 教務課内
TEL:075-251-4630 FAX:075-251-3064 E-mail:ji-pbl@mail.doshisha.ac.jp

ホームページもご覧ください <http://www.doshisha.ac.jp/academics/institute/ppsc/>